

<3歳クラス I・II期 6月> 「友達への関心とかかわりを支える」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルスにより、例年とは違う新年度の始まりとなった。各家庭で4月の入園に向けて気持ちを高めてくれていたにもかかわらず、入園式が延期され保護者と過ごす時間が長くなり、幼稚園生活への楽しみが薄くなってしまった。入園後は、家庭での居心地のよさを感じる幼児一人一人のあるがままを受け入れ、園に慣れて安心して遊ぶことができるよう丁寧に接することを心がけた。

1週間ほど経ち、少しずつ園生活や環境に慣れてくると、池でのオタマジャクシ捕まえや遊具遊びなど、各々が興味のある遊びをするようになった。今年度は、新型コロナウイルス予防の観点から、外遊びを主とした保育を行っているため、全クラスの幼児が外で好きな遊びを楽しんでいる。3歳クラス児の中にも、年上の幼児の遊びに興味をもち、教師の側を離れて、その周辺で遊びの様子を眺めたりいつの間にか遊びに参加したりする幼児もいた。池では、年上の幼児がさまざまな道具を使ってオタマジャクシを捕まえている様子を見て自分も道具を使い、雨どい遊びでは、遊びのイメージを理解できないものの、雨どいに砂を流すなど、自分のしたいことや思い付いたことをやろうとする姿が見られるようになった。

年上の幼児の存在に気が付き始めると、同じ部屋で過ごしている同年齢の幼児の存在も気になり始める。そのような中、帰りの集まりで、A児B児の誕生会をした。インタビューをし、誕生日の歌を歌って、みんなで「おめでとう」と言うと、「次は誰?」「この子の名前は〇〇って言うの?」と、興味津々な様子だった。また、同じテーブルでおやつを食べる幼児や近くにきた幼児に対して、「あの子は誰?」と教師に尋ねるようになってきた。振り返りタイムで、その様子を共有すると、教師は友達に関心をもち始めた機を捉えて、その関心を支えようと、帰りの集まりに「あなたのお名前は」という歌を歌いながら、一人一人の名前を紹介する活動を始めることにした。

5月27日

教師：「昨日、この時間にお誕生会をやったね。そのお友達のお名前、覚えているかな?」A児を呼び、教師と並ぶ。

「あっ!何だったっけ?」「昨日、お誕生会の歌、歌ったよね」などと口々に言うが、名前を言える幼児はいない。

教師：「お名前を教えてもらおう歌があるんだよね。先生が歌おうかな。」教師が歌い始める。

「♪あ～あなたのおなまえは～?」歌の最後でA児にマイクを向ける。

A児：「・・・」

教師：「お名前どうぞ」側でささやく。

A児：「〇〇です」小さい声で言う。

教師：「♪あら、すてきなお名前ね～」最後まで歌う。

「Aちゃん、上手に言えたね。みんなで呼んでみようか?せーの」

幼児：「Aちゃーん!」

A児：「はい」

教師：「大きなお返事だったね」

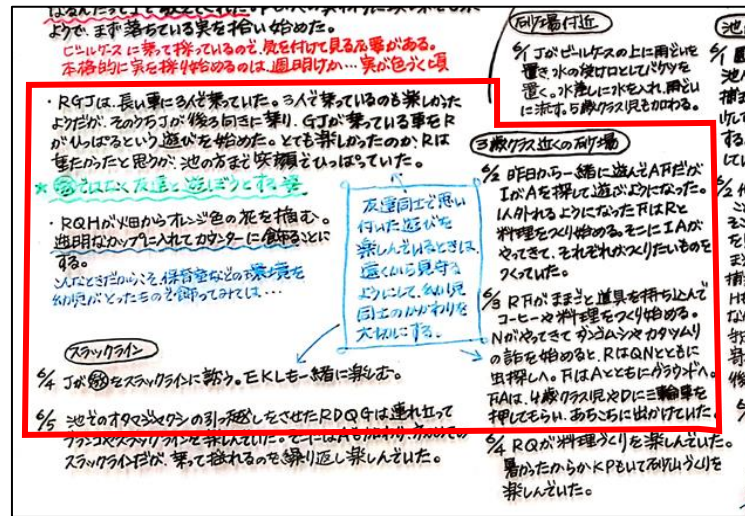
教師が拍手をすると、みんなも拍手をする。

C児：「次は誰のお名前?」

C児の一言がきっかけとなり、次にB児も呼んで同じように歌を歌って名前を呼ぶ。「今度は誰?」「私はいつ?」という言葉があちらこちらから聞かれ、続きは明日行うことにする。

この名前を紹介する活動を毎日2～3名ずつ続けた。前に出て名前を呼ばれた幼児はとても嬉しそうに返事をしていた。幼児は自分の名前が紹介されることをとても楽しみにし、毎回この活動が終わるたびに「私はいつ?」「僕は?」という声が聞かれた。また、友達の名前を知ること、同じグループの友達に話しかけたり、教師に「あの子、〇〇ちゃんだよね」と確認したりする姿も見られるようになった。この活動は、自分の名前が紹介され気持ちが満たされると同時に、友達の名前にも興味が向き、自分も友達も大切にされる活動だと言える。振り返りタイムでは、担任、副担任とも、この活動を通して、幼児と一緒に生活する同年齢の友達への関心や興味も一気に高まったと感じていたことが分かった。友達へ関心が向かい始めた頃にこの活動を取り入れたことで、名前をきっかけとして友達への興味が膨らみ、親しみをもつことにつながり、友達への関心を支える一助になったことを確認した。友達へどう接していいかも分らなかった入園初期だが、「名前」を知らせたり知ったりすることで、緊張が解け幼児同士の親和性が増したことを実感した。

6月1日～5日の保育記録から



※記録のイニシャルは本文とは異なります。

＜3歳クラス近くの砂場＞

6/2 昨日から一緒に遊んでいたDEだが、FがDを探して遊ぶようになった。一人外れるようになったEはGと砂で料理をつくり始める。そこにFDがやってきて、それぞれが作りたいたいものをつくっていた。

6/3 GEがままごと道具を持ち込んでコーヒーや料理をつくり始める。Hがやってきて、ダンゴムシやカタツムリの話を始めると、GはHIとともに虫探しへ。EはDとともにグラウンドへ。4歳クラス児やJに三輪車を押しもらい、あちこちに出かけていた。

友達同士で思い付いた遊びを楽しんでいるときには少し離れて見守るようにし、幼児同士のかかわりを大切にする

＜玄関付近＞

6/3 GKLは、長い車に3人で乗っていた。3人で乗っているのも楽しかったようだが、そのうちLが一人後ろ向きに乗り、KLが乗っている車をGが引っ張るという遊びを始めた。Gは重たかったと思うが、池の方まで笑顔でひっぱっていた。

★教師ではなく友達と遊ぼうとする姿

この週は、名前を紹介する活動をまだ続けていた。6月2日の記録では、幼児同士と一緒に遊ぶようになったことやF児がD児を求めてやってきたことを書いた。これまで、教師を中心とした集団からそう遠くないところで遊んでいたが、教師は、最初から教師のもとを離れ、友達と一緒に遊ぶようになった変化を意識していた。そして、その関係を壊さないように、教師は側でお客さん役になりながら遊ぶ様子を見守っていた。しかし、4人集まったところで同じイメージを共有して遊ぶわけではなく、それぞれがつくりたいものをつくる一人遊びをしているところが3歳クラス児らしい姿でもある。3日も、最初からGEが会話を交わしながらままごとをしている姿やHの話に興味をもって一緒に虫探しに行く姿、連れだって出かけて三輪車を押し合う姿など、幼児同士のかかわりが広がってきた様子を記している。違う場所でも、幼児同士が楽しそうに車を引っ張って遊んでいた様子が見られたことを残している。保育記録には、教師の援助として、「友

達同士で思い付いた遊びを楽しんでいるときには少し離れて見守るようにし、幼児同士のかかわりを大切にすると記述している。それは、振り返りタイムで情報共有し確認した援助の方針であり、教師は、それぞれの場面の状況に応じて、客になって「おいしそう」と言いながら一緒にままごと遊びをしたり、友達とかかわっているときはあえて言葉をかけないようにしたりしながら、友達とかかわる楽しさを感じられるように援助することを心がけた。また、★印（幼児の姿について記録しておこうと思ったポイントの印）の「教師ではなく友達と遊ぶとする姿」という言葉は、「これまで教師を安心基地として求めることが多かったが、「教師だけでなく友達を求めるようになった」という変化を短く書き留めたものである。のびのび保育シートにも、「気になり始めた友達～友達への関心を支える活動」として、名前を紹介する活動を始めたこととその後の幼児の変化について触れるなど、名前紹介の活動を始めてほんの1週間ではあるが、確実に友達への興味やかかわりが広がってきたと感じた。

6月18日

K児M児G児I児が、その家でままごと道具を持ち込み、砂や葉っぱを使って料理づくりを始める。そこにL児がやってくる。

L児：「ねえ、おうちごっこしようよ」K児M児G児I児を誘う。

K児：「いいよ」

すると、他の幼児も「いいよ」と言う。

教師：「Lちゃん、よかったね。みんながいいよって言ってくれたね」

L児：「僕、お父さんやる」

K児：「私、お母さん」

G児：「……私もお母さんがいい」泣きそうな顔だが、しっかりとつぶやく。

教師：「そっかあ。よく言えたね、Gちゃん」

K児：「…じゃあ、一緒にお母さんやる？」

教師：「Kちゃんが、『一緒にお母さんやる？』って聞いているよ。どうする？」教師が尋ねると、G児が

うなずく。

「Kちゃん、ありがとう。Gちゃん、よかったね」

M児：「じゃあ、僕、お兄さん」G児とK児のやりとりをみていたM児が最後に言う。

少し離れていたところから見ていたH児が近付いてきて「ピンポン」と口で言う。不思議そうな顔をしてL児たちが見ている。

教師：「あれ、お客さんかな？」

H児は「お客さん役」ということになり、おうちに入れてもらう。

翌日も、同じ場所で、M児H児G児K児E児がおうちごっこを始めたが、役は昨日と異なっている。そこにL児J児F児がやって来ると、それまでいた幼児は「仕事に行く」と言ってキックバイクや三輪車に乗って出かけていく。

まだまだ教師の存在は必要だが、友達にも興味が向かい、友達と一緒に何かすること自体が楽しくなってきた中で、初めてごっこ遊びと言えるような遊びが見られた。複数の友達とかかわることで遊びのイメージが膨らんだのか、L児は本物のお父さんのようなセリフを言いながら遊んでいた。他の幼児たちは、L児の「おうちごっこ」という言葉からイメージできたのか、自分になりたい役を見付けていた。教師は、楽しそうな雰囲気ですりとりをする様子を見守りながら、役を決めるときにはG児とK児の間を仲介して遊びが続くように援助した。その楽しそうな様子が伝わったのか、H児も仲間に加わってくる。おうちごっこをしていることが分かり、その仲間に入りたくて「ピンポン」とまるで来訪者のようにやってきたのだろう。このようなアイディアが浮かぶのも、おうちごっこの仲間に入りたいという気持ちの表れだとすると、遊びを通して発想する力も豊かに育まれていくのだと感じた。また、翌日もおうちごっこを始めた姿から、初めてのおうちごっこが楽しかったことが伝わってくる。キックバイクで出かけていくことを「仕事に行く」と表現するのも、おうちごっこの世界に浸っているからと言えよう。一人遊びをたっぷり楽しむ一方で、こうした友達とかかわって遊ぶ楽しさも味わうようになってくると、遊びも変化し、一人一人がイメージをもちながら遊んでいることを実感した。

考察

コロナ禍により園での保育も影響を受ける中、遊びの大前提となる幼児の安心感を支えるために、幼児一

人一人の様子を丁寧に読み取り、副担任と情報を共有しながら、翌日の援助に活かしていくことが欠かせなかった。その中で、外遊び中心の保育のため、年上の幼児の遊びややっていることに触れる機会が多く、大いに刺激になっていることや幼児の関心が年上の幼児から同年齢の幼児に向き始めた変化についても共有できた。教師は、年上の幼児から受けた刺激をもとに、少しずつ自分のしたいことや興味のあることを見付けて遊ぶようになった様子を見て、同年齢への幼児にも向いた関心を支えることができれば、一緒に過ごしている友達にも親しみがわき、登園をより楽しみにするようになるのではないかと考えていた。そこで、機を捉えて、名前を紹介する活動を行うことにした。

その後の遊びの様子から、友達への関心が高まると同時に、友達とかかわろうとする姿が増え、遊びのイメージも広がり、一緒に遊ぶことが楽しい段階からごっこ遊びへと遊びも複雑に変化していることが分かる。名前を紹介する活動がきっかけとなり、これまで内にもっていた友達への関心が一気に表出し、親しみを感じながらかかわろうとするようになったのだろう。教師の存在はまだ必要だが、教師を仲立ちにしなくても、幼児同士で声をかけ合い、教師から離れて連れ立って出かけていく姿が見られつつある。その姿は、教師が思っていた以上だった。その背景には、コロナ禍の状況における外遊び中心の保育が、例年以上に異年齢のかかわりを促すものになっていたこともあるだろう。

友達への興味や関心を支えることは、友達への親しみを増し、自分から友達にかかわろうとする姿を支えることにつながると言える。それは、幼児自らが周囲の環境や友達とかかわって遊びをつくっていく第一歩であると考え。教師は、これからの育ちの中で、幼児がトラブルなどの経験や友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わいながら、人とよりよくかかわっていけるようになることを願っている。まずは、友達への関心を支えることを大切にしようと考え、タイミングを捉えて場面に応じた援助を行った。実際にこの期の終わりには、朝の支度を終えると誘い合って外に出かけていく姿や生き物を見付けると生き物に詳しい幼児を呼んでくる姿が見られるようになった。そして、友達と遊ぶことが楽しい時期から、少しずつ自分の思いを通してトラブルになる様子が見られるようになり、人とのかかわりを通して、自分の気持ちに折り合いをつけることも経験し始めている。

年間指導計画のⅡ期には、こんなふうに育ってほしい姿として「友達のしていることを真似しながら、友達と一緒にいることを楽しむ」とあり、教師も友達と一緒に遊ぶことを求めていたわけではない。担任と副担任が、幼児の姿をもとに日々の援助について共通認識をもっていたことにより、タイミングを捉えた援助を行うことができ、幼児が友達に関心をもって一緒に遊ぶことの楽しさを味わい、かかわりを広げていく姿を支えることにつながったと考える。

<3歳クラス I・II期 6月> 「友達への関心とかかわりを支える」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルス感染症により、例年とは違う新年度の始まりとなった。各家庭で4月の入園に向けて気持ちを高めてくれていたにもかかわらず、入園式が延期され保護者と過ごす時間が長くなり、幼稚園生活への楽しみが薄くなってしまった。入園後は、家庭での居心地のよさを感じている**幼児一人一人のあるがままを受け入れ、園に慣れて安心して遊ぶことができるよう丁寧に接すること**¹を心がけた。

1週間ほど経ち、少しずつ園生活や環境に慣れてくると、池でのオタマジャクシ捕まえや遊具遊びなど、各々が興味のある遊びをするようになった。今年度は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、外遊びを主とした保育を行っているため、全クラスの幼児が外で好きな遊びを楽しんでいる。**3歳クラス児の中にも、年上の幼児の遊びに興味をもち²**、教師の側を離れて、その周辺で遊びの様子を眺めたりいつの間にか遊びに参加したりする幼児もいた。池では、年上の幼児がさまざまな道具を使ってオタマジャクシを捕まえている様子を見て自分も道具を使い、雨どい遊びでは、遊びのイメージを理解できないものの、雨どいに砂を流すなど、自分のしたいことと思いついたことをやろうとする姿が見られるようになった。

年上の幼児の存在に気付き始めると、同じ部屋で過ごしている同年齢の幼児の存在も気になり始める。そのような中、帰りの集まりで、A児B児の誕生会をした。インタビューをし、誕生日の歌を歌って、みんなで「おめでとう」と言うと、「次は誰?」「この子の名前は〇〇って言うの?」と、興味津々な様子だった。また、同じテーブルでおやつを食べる幼児や近くに来た幼児に対して、「あの子は誰?」と教師に尋ねるようになってきた。振り返りタイムで、その様子を共有すると、**教師は友達に関心をもち始めた機を捉えて、その関心を支えよう³**と、帰りの集まりに「あなたのお名前は」という歌を歌いながら、一人一人の名前を紹介する活動を始めることにした。

5月27日

教師：「昨日、この時間にお誕生会をやったね。そのお友達のお名前、覚えているかな?」A児を呼び、教師と並ぶ。
「あっ!何だったっけ?」「昨日、お誕生会の歌、歌ったよね」などと口々に言うが、名前を言える幼児はいない。
教師：「**お名前を教えてもらおう歌があるんだよね。先生が歌おうかな⁴**」教師が歌い始める。
「Aあ〜あなたのお名前は〜?」歌の最後でA児にマイクを向ける。
A児：「・・・」
教師：「お名前どうぞ」側でささやく。
A児：「〇〇です」小さい声で言う。
教師：「♪あら、すてきなお名前ね〜」最後まで歌う。
「Aちゃん、上手に言えたね。みんなで呼んでみようか?せーの!」
幼児：「Aちゃーん!」
A児：「はいー」
教師：「大きなお返事だったね」
教師が拍手をすると、みんなも拍手をする。
C児：「次は誰のお名前?」
C児の一言がきっかけとなり、次にB児も呼んで同じように歌を歌って名前を呼ぶ。「今度は誰?」「私はいっつ?」という言葉があちらこちらから聞かれ、続きは明日行うことにする。

この名前を紹介する活動を毎日2〜3名ずつ続けた。前に出て名前を呼ばれた幼児はとても嬉しそうに返事をしていた。幼児は自分の名前が紹介されることをとても楽しみにし、毎回の活動が終わるたびに「私はいっつ?」「僕は?」という声が聞かれた。また、友達の名前を知ること、同じグループの友達に話しかけたり、教師に「あの子、〇〇ちゃんだね」と確認したりする姿も見られるようになった。この活動は、自分の名前が紹介され**気持ちが満たされると同時に、友達の名前にも興味向き、自分も友達も大切にされる活**

コメントの追加 [o1]: 教師のこの考えに対して、他の教師からも、幼児側に立った援助であること、信頼関係を築く援助であることという指摘が多かった。

教師が幼児のありのままの姿を受け入れ寄り添うことが幼児の安心感につながっていく。その安心感は、幼児が自らしたいことを見付け遊び出すための大前提となるものである。どの教師もまずは幼児の安心感を育み信頼関係を気付くことを大事にしていると言える。

コメントの追加 [o2]: ここでの担任・副担任の援助に対して、捉えた幼児の姿をもとに、活動や援助を考えているという指摘が多かった。日々、年間指導計画に沿って保育を進めているが、援助を考えるときにはその計画が優先される訳ではなく、教師は目の前の幼児の姿を大切にし、そこからどのような力を育むことができるか、そのために何ができるのかを考えている。指摘が多かったことから、他の教師もその点を意識して保育を行っているのだろう。教師が、幼児の様子からタイミングを捉えて活動を取り入れることにより、幼児の興味や関心を支えたとともに幼児が自ら動き出すきっかけになることを願っている。

¹ あるがままであることが大切 (c) 幼児の目線に立った援助 (e) 幼児に寄り添う援助 (d) 信頼関係を築くための大切な援助 (f)

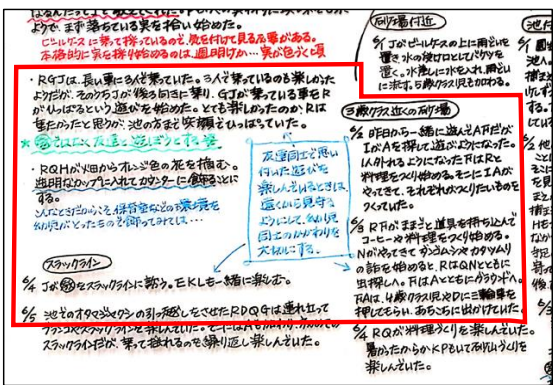
² 本園ならではの。自然と年上の幼児とのかかわりをもてる (d)

³ 幼児のその時の実態から活動を考えている (g) 幼児の実態、成長に合わせた援助 (d) 幼児の姿がもとになったタイミングでのスタート (「計画ありき」ではない) (e) 関心という気持ちを支える (c)

⁴ 自然な流れから活動始める (e)

動だと言える。振り返りタイムでは、担任、副担任とも、この活動を通して、幼児と一緒に生活する同年齢の友達への関心や興味も一気に高まったと感じていたことが分かった。友達へ関心が向かい始めた頃にこの活動を取り入れたことで、名前をきっかけとして友達への興味が膨らみ、親しみをもつことにつながり、友達への関心を支える一助⁵になったことを確認した。友達へどう接していいかも分からなかった入園初期だが、「名前」を知らせたり知ったりすることで、緊張が解け幼児同士の親和性が増したことを実感した。

6月1日～5日の保育記録から



※記録のイニシャルは本文とは異なります。

<3歳クラス近くの砂場>

6/2 昨日から一緒に遊んでいたDEだが、FがDを探して遊ぶようになった。一人外れるようになったEはGと砂で料理をつくり始める。そこにFDがやってきて、それぞれがやりたいものをつくっていた。

6/3 GEがままごと道具を持ち込んでコーヒーや料理をつくり始める。Hがやってきて、ダンゴムシやカタツムリの話を始めると、GはHIとともに虫探しへ。EはDとともにグラウンドへ。4歳クラス児やJに三輪車を押ししてもらい、あちこちに出かけていた。

友達同士で思い付いた遊びを楽しんでいるときには少し離れて見守るようにし、幼児同士のかわりを大切にする

<玄関付近>

6/3 GKLは、長い車に3人で乗っていた。3人で乗っているのも楽しかったようだが、そのうちLが一人後ろ向きに乗り、KLが乗っている車をGが引っ張るという遊びを始めた。Gは重たかったと思うが、池の方まで笑顔でひっぱっていた。

★教師ではなく友達と遊びようとする姿

この週は、名前を紹介する活動をまだ続けていた。6月2日の記録では、幼児同士が一緒に遊ぶようになったことやF児がD児を求めてやってきたことを書いた。これまで、教師を中心とした集団からそう遠くないところで遊んでいたが、教師は、最初から教師のもとを離れ、友達と一緒に遊ぶようになった変化を意識

⁵ 満足感、興味関心といった内面を大事にする（e） 友達とのかかわりを広げるための援助（f） 内面を大事にする（c）

していた。そして、その関係を壊さないように、教師は側でお客様役になりながら遊ぶ様子を見守っていた。⁶しかし、4人集まったところで同じイメージを共有して遊ぶわけではなく、それぞれがやりたいものをつくる一人遊びをしているところが3歳クラス児らしい姿でもある。3日も、最初からG・Eが会話を交わしながらままごとをしている姿やHの話に興味をもって一緒に虫探しに行く姿、連れだって出かけて三輪車を押し合う姿など、幼児同士のかかわりが広がってきた様子を記している。違う場所でも、幼児同士が楽しそうに車を引っ張って遊んでいた様子が見られたことを残している。保育記録には、教師の援助として、「友達同士で思い付いた遊びを楽しんでいるときには少し離れて見守るようにし、幼児同士のかかわりを大切に⁷する」と記述している。それは、振り返りタイムで情報共有し確認した援助の方針⁸であり、教師は、それぞれの場面の状況に応じて、客になって「おいしそう」と言いながら一緒にままごと遊びをしたり、友達とかかわっているときはあえて言葉をかけないようにしたり⁹しながら、友達とかかわる楽しさを感じられるように援助することを心がけた。また、★印（幼児の姿について記録しておこうと思ったポイントの印）の「教師ではなく友達と遊ぶようにする姿」という言葉は、「これまで教師を安心基地として求めることが多かったが、教師だけでなく友達を求めるようになった」という変化を短く書き留めた¹⁰ものである。のびのび保育シートにも、「気になり始めた友達へ友達への関心を支える活動」として、名前を紹介する活動を始めたこととその後の幼児の変化について触れるなど、名前紹介の活動を始めてほんの1週間ではあるが、確実に友達への興味やかかわりが広がってきたと感じた。

コメントの追加 [03]: 教師のこの援助や考え方に対し、教師と一緒に遊びながらも出過ぎることなく幼児同士のかかわりを第一に考えているという指摘が多かった。

安心感を得て遊び出した幼児が、友達の存在や友達の一にしていることに興味をもち、少しずつかわるようになってきた。教師は、その姿を見て、料理を食べるお客様役になって一緒に遊びながらも、どちらかと言えば見守りに近い気持ちでいた。それは、これから先、幼児同士でよりかわり合う姿を思い描きながら、教師が中心になるのではなく、まず実際に目の前にいる友達とかかわろうとする姿を大切に思っているからである。

日々の保育の中で、幼児同士がかかわって遊ぶそれぞれの場面を丁寧に読み取りながら、経験を重ねていくことを大切にしている。

6月18日

K児M児G児I児が、その家でままごとと道具を持ち込み、砂や葉っぱを使って料理づくりを始める。そこにL児がやってくる。

L児:「ねえ、おうちごっこしようよ」K児M児G児I児を誘う。

K児:「いいよ」

すると、他の幼児も「いいよ」と言う。

教師:「Lちゃん、よかったね。みんながいいよって言ってくれたね」¹¹

L児:「僕、お父さんやる」

K児:「私、お母さん」

G児:「……………私もお母さんがいい」泣きそうな顔だが、しっかりとつぶやく。

教師:「そっかあ。よく言えたね」¹²、Gちゃん」

K児:「…じゃあ、一緒にお母さんやる？」

教師:「Kちゃんが、『一緒にお母さんやる?』って聞いているよ。どうする?」¹³教師が尋ねると、G児がうなずく。

「Kちゃん、ありがとう。Gちゃん、よかったね」¹⁴

M児:「じゃあ、僕、お兄さん」G児とK児のやりとりをみていたM児が最後に言う。

少し離れていたところから見ていたH児が近付いてきて「ピンポーン」と口で言う。不思議そうな顔をしてL児たちが見ている。

教師:「あれ、お客さんかな?」¹⁵

H児:「そうだよ」

H児はお客さん役ということになり、おうちに入れてもらう。

⁶ 幼児の姿・育ちからくる援助（e） 幼児同士のかかわりを第一に考え、遊びに参加しながらも出しゃばらず見守る姿勢に徹する（g） お客様役になっているにもかかわらず見守っている。教師がでしゃばらない（c） 安心して幼児同士が遊ぶ姿が見られるようになってきたことで幼児同士のかかわりを大切にするために、対教師になりすぎないように見守りながら楽しい雰囲気の中で遊ぶ（場所、空間を共にする）。教師がお客様に役になることで幼児同士では満たされない部分を補う（f）

⁷ 少し離れて見守る。幼児同士のかかわりを大切にしている（d） 少しずつ離れていくが見守っている（c）

⁸ 同じ方向性で援助する（e）

⁹ 幼児同士のかかわりを優先（g） あえて言葉をかけない幼児同士のかかわりを大切にしている（d） よりよくかわる力が育つようにあえて援助しない（e）

¹⁰ ★印ポイントの記述が保育の妥当性を確認する一助になる（e）

¹¹ 安心感・意欲を支える（e）

¹² 言葉で伝える姿を肯定的な言葉がけで支える（e）

¹³ 問いによる選択を促す援助（c）

¹⁴ 自他を大切にする雰囲気（e）

¹⁵ イメージの仲介（一人一人の経験の違いを埋める）（e） あれ、お客さんかな！イメージの仲介（d）

翌日も、同じ場所で、M児H児G児K児E児がおうちごっこを始めたが、役は昨日と異なっている。そこにL児J児F児がやって来ると、それまでいた幼児は「仕事に行く」と言ってキックバイクや三輪車に乗って出かけていく。

まだまだ教師の存在は必要だが、友達にも興味が向かい、友達と一緒に何かすること自体が楽しくなってきた中で、初めてごっこ遊びと言えるような遊びが見られた。複数の友達とかかわることで遊びのイメージが膨らんだのか、L児は本物のお父さんのようなセリフを言いながら遊んでいた。他の幼児たちは、L児の「おうちごっこ」という言葉からイメージできたのか、自分になりたい役を見付けていた。教師は、**楽しそうな雰囲気ですりとりをする様子を見守りながら、役を決めるときにはG児とK児の間を仲介して遊びが続くように援助¹⁶した。**その楽しそうな様子が伝わったのか、H児も仲間に加わってくる。おうちごっこをしていることが分かり、その仲間に入りたくて「ピンポン」とまるで来訪者のようにやってきたのだろう。このようなアイディアが浮かぶのも、おうちごっこの仲間に入りたいという気持ちの表れだとすると、**遊びを通して発想する力も豊かに育まれていく¹⁷のだと感じた。**また、翌日もおうちごっこを始めた姿から、初めてのおうちごっこが楽しかったことが伝わってくる。キックバイクで出かけていくことを「仕事に行く」と表現するのも、おうちごっこの世界に浸っているからとも言えよう。一人遊びをたっぷり楽しむ一方で、こうした友達とかかわって遊ぶ楽しさも味わうようになってくると、遊びも変化し、一人一人がイメージをもちながら遊んでいることを実感した。

考察

コロナ禍により園での保育も影響を受ける中、遊びの大前提となる幼児の安心感を支えるために、幼児一人一人の様子を丁寧に読み取り、副担任と情報を共有しながら、翌日の援助に活かしていくことが欠かせなかった。その中で、外遊び中心の保育のため、年上の幼児の遊びややっていることに触れる機会が多く、大いに刺激になっていることや幼児の関心が年上の幼児から同年齢の幼児に向き始めた変化についても共有できた。教師は、年上の幼児から受けた刺激をもとに、少しずつ自分のしたいことや興味のあることを見付けて遊ぶようになった様子を見て、同年齢への幼児にも向いた関心を支えることができれば、一緒に過ごしている友達にも親しみがわき、登園をより楽しみにするようになるのではないかと考えていた。そこで、**機を捉えて¹⁸、名前を紹介する活動を行うこととした。**

その後の遊びの様子から、友達への関心が高まると同時に、友達とかかわろうとする姿が増え、遊びのイメージも広がり、一緒に遊ぶことが楽しい段階からごっこ遊びへと遊びも複雑に変化していることが分かる。名前を紹介する活動がきっかけとなり、これまで内にもっていた友達への関心が一気に表出し、親しみを感じながらかわろうとするようになったのだろう。教師の存在はまだ必要だが、教師を仲立ちにしなくても、幼児同士で声をかけ合い、教師から離れて連れ立って出かけていく姿が見られつつある。その姿は、教師が思っていた以上だった。その背景には、コロナ禍の状況における外遊び中心の保育が、例年以上に異年齢のかかわりを促すものになっていたこともあるだろう。

友達への興味や関心を支えることは、友達への親しみを増し、自分から友達にかかわろうとする姿を支えることにつながると言える。それは、幼児自らが周囲の環境や友達とかかわって遊びをつくっていく第一歩であると考え。教師は、これからの育ちの中で、幼児がトラブルなどの経験や友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わいながら、人とよりよくかわっていくようになることを願っている。¹⁹**まずは、友達への関心を支えることを大切にしようと考え、タイミングを捉えて場面に応じた援助²⁰を行った。**実際にこの期の終わりには、朝の支度を終えると誘い合って外に出かけていく姿や生き物を見付けると生き物に詳しい幼児を呼んでくる姿が見られるようになった。そして、友達と遊ぶことが楽しい時期から、少しずつ自分の思いを通そ

コメントの追加 [04]: 教師のこの援助に対し、幼児の言葉のやりとりを見守るだけでなく、会話に加わりながら幼児の気持ちを代弁したりかわりを広げたりしているという指摘があった。またつなぎ役という指摘もあった。ここでも教師が出過ぎることなく、仲介役として幼児同士のやりとりをつなぐという援助を他の教師も意識していると言えるだろう。教師が、幼児の言葉で伝える姿を称賛したり代弁したりして、言葉で伝えようとする気持ちを支えることを大切にしている。

¹⁶ 幼児同士の言葉のやりとりを大切に。見守るだけでなく幼児同士の会話に耳を傾けながら遊びに加わり一緒に楽しむ（他児の遊びに興味を示し、友達とかかわりが広がるような支援）。子どもの要求が子ども同士で叶わないときは教師が受け止めて代弁する（f） 援助が教師の主体的な行動ではない（c） 教師はあくまでつなぎ役で、誘導はしない（e）

¹⁷ 遊びからイメージが膨らむ幼児の姿と、幼児の遊ぶ様子から発想力が育まれていることに気付く保育者の視点（g）

¹⁸ すぐではない。常に幼児の動向を見て機会をうかがう（c） 幼児の実態を常に考え、タイミングを見ている（d）

¹⁹ 発達観、保育観、願いをもって保育している（e）

²⁰ 「まず」よく見て捉えて場面に応じた援助を行う（c）

うとしてトラブルになる様子が見られるようになり、人とかかわりを通して、自分の気持ちに折り合いをつけることも経験し始めている。

年間指導計画のⅡ期には、こんなふうに育ってほしい姿として「友達のしていることを真似しながら、友達と一緒にいることを楽しむ」とあり、教師も友達と一緒に遊ぶことを求めているわけではない。担任と副担任が、**幼児の姿をもとに日々の援助について共通認識をもっていた**²¹ことにより、タイミングを捉えた援助を行うことができ、幼児が友達に関心をもって一緒に遊ぶことの楽しさを味わい、かかわりを広げていく姿を支えることにつながったと考える。

コメントの追加 [o5]: 本園では、担任と副担任が子どもの姿や遊びの様子、援助の内容など共有しながら同じ認識で保育を進めている。毎日の振り返りタイムで情報共有し援助の方針を確認することで保育の目指す方向が具体的に語られるため、迷いや悩みはありながらも独りよがりな考えにならないよさを感じているのだろう。こうした複数での語り合いにより、日々の援助が幼児の主体性を大切にしたものになっているかどうか評価し改善につなげている。

²¹ 担任、副担任で共通認識を持った援助を大切にしており、その共通認識の内容は実際の幼児の姿から(リアルタイム)日々されていること

(g) 担任、副担任が振り返りの中で、援助の仕方や遊びの過程、そのときの子どもたちの姿を伝え合うことで援助の方向性を確認していくことが大切 (f)

<3歳クラス Ⅲ期 9～11月> 「年上の幼児とのかかわりから遊びを広げる」

これまでの保育の様子

夏季休業中の8月下旬に、園開放を兼ねた「にこにこデー」を開催している。そこにやってきたA児が、4歳クラスにカラービニール袋でつくった衣装が並んでいる様子を見て、「それが着たい」と3歳クラス担任に話す。しかし、通常の保育とは違う日だったため、A児は衣装を着ることは叶わなかった。コロナ禍により、屋外での遊び中心の保育となり、年上の衣装づくりや衣装を使ったごっこ遊びに触れる機会が少なかったが、担任は、この機会にA児がカラービニール袋の衣装に興味をもったことは、新学期に新しい遊びに触れるよいきっかけになると考えた。副担任と相談して、保育室テラスにテーブルと材料を用意し、製作ができる環境を整えることにした。

新学期が始まり、衣装のことを思い出したA児は、担任に「あのドレス、つくりたい」と伝えた。担任と誰に教えてもらうか相談していると、A児は、衣装がかかっていた4歳クラスの幼児ではなく、いつも声をかけて遊び道具を一緒につくってくれる5歳クラス児に教えてもらいたいと言い、担任とともに5歳保育室に出かけた。A児は、自分で「ドレス、つくって」と5歳クラス児に伝えたものの、5歳クラス児も夢中になってつくっているものがあり、「いいよ。これをつくったら教えてあげる」と言われる。A児は、その言葉に納得し、5歳クラス児から声をかけられるまで待つことにしたが、その日は声がかからなかった。2日後、5歳クラス児が「Aちゃんに頼まれていた衣装、今ならつくれるよ」と3歳保育室に現れたが、A児は他の遊びをしており、タイミングが合わなかった。

その頃、4歳保育室前のテラスで製作遊びをする4歳クラス児の姿を見かけることが多くなった。3歳クラス担任は、その様子を見て、A児が再び衣装づくりをしたいと言うのではないかと思い、製作遊びの援助をしていた4歳クラス副担任にA児が衣装づくりを教わりに行くかもしれないということを伝えていた。

9月30日

A児：「禰豆子の衣装をつくりたい」2日前から、紙を筒状にしたものをつくって口にくわえ、アニメのキャラクターになりきっていたA児が教師のところに来て言う。

担任：「禰豆子の衣装ね、分かったよ。でも、先生、つくり方が分からないんだけど、どうしよう？」

A児：「うみさんのところに行く」

担任：「そうだね。この間、そうしたもんね。そういえば、さっき、やまさんがお部屋の前で何かつくってたよ。もしかしたら教えてもらえるかもしれないね」

A児：「じゃあ、やまさんに行ってみる」

担任：「分かったよ。じゃあ、Aちゃん、袋を持って行こう。何色がいい？」

A児：「んー、黄色がいい」

担任は、教材室から黄色のカラービニール袋を出し、A児に渡す。

A児：「ありがとう」

そのやりとりを近くで見ていたB児C児も「私たちもつくりたい」と言う。担任がビニール袋の色を尋ねると、それぞれピンクと紫色を選ぶ。3人はカラービニール袋を持ち、担任とともに4歳保育室に向かう。

担任：「あのね、やまさん。やまさんにお願ひがあつて来たの。聞いてくれる？」4歳保育室前のテラスで製作をしていた幼児に声をかける。

4歳クラス児：「いいよ。なあに？」A児たちを見る。

担任：「Aちゃん、言える？」

A児：「…あのね…禰豆子の衣装がつくりたい…」小さい声で言う。

担任：「このビニール袋で衣装をつくりたいんだけど、そらさんはつくり方が分からないの」

4歳クラス児：「いいよ。私、つくり方知ってる」

担任：「いいの？ありがとう！Aちゃん、教えてくれるって。よかったね」

A児：「うん。ありがとう」先程より大きい声で言う。

4歳クラス児は、A児が持っていたカラービニール袋を受け取ると、近くにあったマジックで首と手を出す部分に印を付け始める。印を付け終わると、はさみで印の通りにビニール袋を切り取っていく。3人は、その様子をじっと見ている。

4歳クラス児：「はい、できたよ。次は誰？」

4歳クラス児は、つくり方を知らせながら衣装をつくっていく。できあがるたびに一人ずつ着せてくれ、ある程度の長さに切ったスズランテープをお腹のところで縛ってくれる。3人は、お礼を言って保育室に戻り、副担任に衣装を着た姿を見せる。

A児：「やまさんにつくってもらったんだよ！」笑顔で言う。

副担任：「うわあ、すてきだね。よく似合っているよ」

A児：「外行こう」

A児がB児C児を誘い、衣装を着たまま、園庭や園舎裏などを回る。

にこにこデーからA児が抱いていた衣装を着たいという思い。思いの強さは日や遊びによって変化したものの、その思いはずっとA児の胸の内にあった。教師にどのような援助ができるのか考えたとき、教師と一緒につくることより、衣装を着て遊んだ経験のある年上の幼児から教わることが幼児のさまざまな経験につながるのではないかと話し合い、副担任と相談してその場を用意することとしていた。担任はA児の思いを支えようと、5歳保育室と一緒にいく。そこでA児は、いつもなら恥ずかしがって教師が代弁するところを、自分から「つくって」とお願いしていた。5歳クラス児の遊びもあるため、A児の思いは叶わなかったが、5歳クラス児の言葉にA児が自分の気持ちに折り合いをつける様子を見て、担任は次にA児から言い出すタイミングを待つことにした。5歳クラス児もA児との約束を覚えていて、忘れずに声をかけにきてくれた姿から、年下の幼児を思いやる気持ちを感じた。異年齢の幼児とのかかわりを通して、自然と年下への責任感や思いやり、年上への尊敬や憧れといった気持ちが育つことを実感する。しかし、5歳クラス児の遊びが広がっていく様子を見て、その合間を見て衣装づくりをお願いすることの難しさを感じていた。ごっこ遊びが盛り上がっていた4歳クラスで、担任と副担任が衣装のことを話題にしていたことを知り、4歳クラス副担任にA児が衣装づくりを尋ねに行くかもしれないことを相談すると、快く受け入れてくれた。この一連の流れは、振り返りタイムで3歳クラス副担任とも共有していた。

5歳クラス児とのタイミングが合わなかったA児は、その後、しばらくアニメのキャラクターになるための道具をつくっていた。「禰豆子だよ！」と、つくったものをキャラクターのようにくわえて遊ぶうちに、キャラクターになりきることと衣装を着ることがA児の中でつながったのだろう。再び「衣装をつくりたい」と担任に伝えに来る。担任は、A児の思いを受け止めながら、4歳クラス児から教えてもらおうという方法を提案し、今度こそA児の思いが実現するように働きかけた。1ヶ月近く抱いていた思いが実現したA児の表情はとても嬉しそうだった。スズランテープを腰で縛ってドレスのようにするのは4歳クラス児のアイディアである。これまでの衣装を着て遊んできた経験が感じられた。A児に請われるがまま、教師が衣装をつくったらスズランテープを腰に巻くところまではしなかった。4歳クラス児に尋ねに行ったからこそ、遊びの中で培われたアイディアを教えてもらうことができた。そして、当初「禰豆子の衣装」だったのが、黄色い色やドレスのような膨らみから「プリンセスのベル」へとイメージを膨らませていった。振り返りタイムでは、副担任が衣装を着て歩いていたA児の名前を呼ぶと「私、ベルだよ」と応えるほどキャラクターになりきっていたことが話題になった。また、この日、4歳クラス担任・副担任ともこのことについて振り返った。4歳クラス担任は、4歳クラス児にとっても「衣装をつくる」という新たな遊びの視点が得られたことや年下の幼児にしてきたことを伝えるという経験ができたことは今後の遊びに生きてくると語り、双方にとって意義があったのではないかと話し合った。

10月1日

B児はハンガーに掛けておいた衣装を製作テーブルのところに持ってくると、折り紙に絵を描いたものを胸の部分に貼る。A児C児は、衣装を着る。

A児：「ここにこれを巻きたい」昨日、4歳クラス児に巻いてもらったスズランテープを持って来る。

副担任：「お腹に巻くの？」

A児：「うん」

B児C児も同じように巻いてもらう。

D児：「私もあれをつくりたい」C児の衣装を指さして言う。

副担任：「いいよ。Cちゃんにどうやってつくったのか聞いてみたらどうかな？」

D児：「どうやってつくったの？」

C児：「やまさんにつくってもらったんだよ。Dちゃんもつくってもらったらいいいんじゃない？」

副担任：「Dちゃんもやまさんに行ってきいてくる？」

D児：「うん。そうする」

E児：「僕も行く」D児と副担任のやりとりを見て言う。

2人ともピンクのカラービニール袋を選び、副担任と一緒に4歳保育室へ向かう。

D児：「わたしも服つくりたいの。教えてください」製作をしている4歳クラス児に向かって言う。

E児：「僕も」

副担任：「やまさん、そらさんに教えてくれる？」

4歳クラス児：「いいよ。ちょっと待ってて」

D児E児：「ありがとう」

副担任：「やまさん、ありがとう。やまさんのおかげだね」

昨日とは違う4歳クラス児も加わって、首と手の部分に印を付け始める。その部分をはさみで切ってい

く。その様子を側で見ていた2人は、できあがったものを受け取り、お礼を言って部屋に戻る。

D児：「どうやって着るの？」

よく見ると、カラービニール袋の輪の部分ではなく口の部分を切ってあったため被ることができない。

副担任：「あれ、ほんとだね。どうやって着るんだろうね。もう一度やまさんに行って、教えてもらおうか」

3人は副担任とともに4歳保育室に行く。切った部分が違っていることに気付いた4歳クラス児がもう一度つくり直して着られるようにしてくれる。

保育室に戻ると、C児は花紙を丸めたものをいくつもつくり、衣装の裾にセロテープで貼り付けている。A児は、厚紙でつくったお面ベルトを頭にはめ、腕には白いコピー用紙を輪っかにしたものを付けている。

副担任：「いっぱい飾りが付いたね。すてきだね」

C児：「私たち、プリンセスなの」

副担任：「すてきね」

F児：「私もつくりたい」 A児たちといた副担任に言う。

A児：「じゃあ、やまさん行く？」

F児：「うん」 A児とともに4歳保育室に向かう。

A児：「Fちゃんもつくってほしいんだって。つくってください」 4歳保育室前のテラスで製作をしていた4歳クラス児に言う。

4歳クラス児：「いいよ。どのペンにする？」 印を付けるペンを選ばせてくれる。

4歳クラス児がつくる様子を近くでじっと見ているA児とF児。できあがると、2人で3歳保育室に戻り、F児も衣装に飾り付けを始める。

これまでカラービニール袋の衣装を着るという発想がなかった3歳クラス児にとって、A児を始めとするB児C児の衣装はとても魅力的に見えた。同じようにつくりたいという幼児に、教師だけでなくA児やB児が4歳クラスに行くと教えてもらえることを知らせたり、あるいは一緒について行ったりしていた。4歳クラス児は、3歳クラス児が行くと、印を付けるペンや腰に巻くテープを選ばせてくれた。まるで仕立屋のように丁寧に対応してくれる様子から年下の幼児に優しくしようという気持ちを感じられた。4歳クラス児の遊びによって衣装づくりを断られることもあったが、3歳クラス児は5歳クラス児だけでなく4歳クラス児も頼りになることを実感した。また、こうしたやりとりを経験している幼児は、4歳クラス児の姿を真似て自然と友達にも教えてあげられるようになるのだろう。副担任は、根気強く対応してくれた4歳クラス児にお礼を言い、保育室では4歳クラス児のおかげで衣装がつくれたことを感じられるような言葉をかけるようにした。

A児たちは、それぞれの発想を活かして、衣装に飾りを付け始め、よりその子らしさが表れるようになった。花紙を丸めたり、折り紙に絵を描いたりして衣装に貼り付ける幼児や衣装の他に冠や腕輪をつくる幼児もいた。衣装を着て「プリンセスなの」と言っていたように、本物のプリンセスのように自分を着飾っていくという新たな楽しみも出てきた。「プリンセス」という言葉が幼児のイメージをより具体化することになり、教師にほしい材料やこうしてほしいという願いを言葉で伝えていた。A児の「衣装をつくりたい」という思いがカラービニール袋の衣装の原型を手に入れることにつながり、その後の飾り付けやなりきりへと遊びが広がっていく様子が伝わってきた。いつものように花紙、折り紙、白いコピー用紙、スズランテープ、布ガムテープ、セロテープなどを出していたが、この日は副担任がお面ベルトも用意していた。振り返りタイムでは、今後、アイテムづくりや飾り付けの材料の種類を増やすことを確認した。それぞれがつくった衣装は、名前のついたハンガーに掛け、幼児の見えるところにぶら下げておくことにした。

10月5日

A児C児がさっそく自分の衣装を副担任に取ってもらい着る。A児は、衣装をロングスカートのようにしている。そこにH児がやってくる。

H児：「僕もつくりたい」 A児たちに向かってつぶやく。

A児：「じゃあ、やまさんに行く？」

H児はA児と副担任と一緒に4歳保育室に行くが、4歳クラス児が他の遊びをしていたため断られる。

副担任：「そらさんにもつくり方を覚えている友達がいるかな？」

C児：「つくりたいの？いいよ。もう私たち分かるから」

F児：「教えてあげよっか」

A児：「じゃあ、先生からもらってきて。何色がいいの？」 副担任のところにカラービニール袋をもらいに行くように促す。

H児が副担任からピンクのカラービニール袋をもらってくると、A児たちがテーブルに広げて、印は付けずにはさみで首と手の部分を切り取る。他の幼児もその様子を見守る。できあがると、F児たちに着せても

らい、C児からスズランテープを腰に巻いてもらう。H児ははにかみながら、お礼を言う。

2日間、4歳保育室に通ってつくり方を間近で見ていたからか、A児C児F児は自分たちで衣装の原型をつくれるようになった。「もう私たち分かるから」という言葉に自信がうかがえる。おそらく困ったら「やまさんに教えてもらおう」と4歳保育室に行くのだろう。副担任もそのように声をかけるつもりだった。振り返りタイムでは、ほとんど4歳クラス児に衣装をつくってもらっていたので自分たちでつくれるのだろうかと思っていた教師は、自分たちの読み取りが浅かったことを反省した。幼児は、幼児同士のやりとりの中でさまざまなことを感じ取りながら、自分ができると思ったタイミングで挑戦し、少しずつ世界を広げていくのだと感じた。また、A児C児F児は、自分たちが4歳クラス児にしてもらったように、H児に同じことをしてあげていた。教師に一切頼ることなく、H児の衣装をつくっていく姿はどこか誇らしげで、できあがった喜びをみんなで共有している雰囲気がとてもよかった。自分たちが4歳クラス児からしてもらったことが嬉しかったのだろう。してもらって嬉しかったことをしてあげるといふ姿を見て、年上の幼児から年下の幼児へと「行為」がつながるとともに「してもらって嬉しい」という気持ちもつながっていくのだと実感した。本園では、日々の保育の中で異年齢のかかわりが当たり前のように見られ、自然とつながりも育まれていく。それでもあえて教師が機を見て年上の幼児に聞きに行く場をつくることで、そうした行為や気持ちのつながりを捉えて、双方の幼児の自己有用感にまで高められるような援助ができるのではないかと考える。

翌日、翌々日と、C児A児F児が他の幼児の衣装を同じようにつくってあげていた。

10月8日

F児は、ハンガーから自分の衣装を取ってもらい着る。A児とともに折り紙で身に付けるものをつくり始める。

F児：「先生、見て」つくったものを通りかかった教師に見せる。

担任：「すてきなものをつくったね。バッグかな？」

F児：「ううん、ブレスレットだよ」

担任：「ああ、なるほど、ブレスレットだねえ」

F児：「バッグもつくるよ」

担任：「バッグもつくるの？Fちゃんすごいね」

F児：「先生、何か箱みたいなの、ない？」

担任：「箱ね、ちょっと待ってね」教材室から大きさの違う箱をいくつか持って来てF児に見せる。

F児：「これがいい」縦、横20cm、幅5cm程の箱を選ぶ。そこにスズランテープを付け、肩からかけられるようにする。黄色の折り紙でハートをつくり、バッグに見立てた箱に貼る。

A児：「私もつくりたい。箱ちょうだい」F児がバッグをつくっている様子を見て担任に言う。

担任：「どんな箱がいいの？」

A児：「Fちゃんとおんなじの」

担任：「うーん、Fちゃんと同じ箱はないけど…似たような箱ならあるよ」F児に渡した箱と同じような大きさの箱を見せる。

A児：「それでいい」

担任：「よかった。はい、どうぞ」

A児：「ありがと」F児がつくっていたように、スズランテープを付け、折り紙の飾りを付ける。

G児もF児A児と同じようにバッグをつくらうとするが、同じような大きさの箱はもうなくなってしまった。

I児：「これでも物が入れるでしょ」近くで、折り紙とスズランテープでバッグのようなものをつくっていたI児がつくっていたものをG児に見せながら言う。

G児：「ほんとだね」I児がつくっているものを見ながら、折り紙とスズランテープで同じようにつくり、肩からかける。

A児の衣装づくりから始まり、興味をもった幼児はだいたい自分の衣装をつくっていた。教師は、それらをいつでも手に取れるようにハンガーに掛けていた。この頃になると、自分の衣装の飾り付けを楽しみ、その日の気分に合わせて、おうちごっこのお母さん役やプリンセスになっていた。その中で、教師のやりとりから、F児が廃材を使ってバッグをつくることを思い付く。以前、副担任とも打合わせをしていたので、箱はさまざまな大きさのものをいくつか用意していたが、F児が選んだものは数が少なかった。G児が他の大きさの箱を選ぶかと思っていたら、I児の思いもかけない提案により、より身近な材料で入れ物をつくり、バッグに見立てていた。G児は、F児のような箱のバッグではなかったが、とても満足して、つくったバッグを身に付けていた。箱などの特別な材料がなくても、あるものでつくりたいと思えばつくれることを経験した幼児によって、どんどんアクセサリやバッグ、ステッキ、冠などがつくられるようになり、幼児の間に少しずつ広まっていった。教師は、衣装をつくったことに満足するのではなく、そこからイメージを膨らませてアクセサリなどをつくる姿に遊びの広がりを感じ、必要に応じて材料を渡せるようにしていた。バッグなど

が出来上がると、それらを身に付けて、「お店屋さん」になることもあった。次々になりたいものを変えてなりきる中で、A児が新しいアニメキャラクターになるために、違う色のカラービニール袋が欲しいと言ってくる。担任は、一度渡すと、他の幼児も次々に違う色のカラービニール袋を欲しがらるだろうと考え、渡すかどうか迷った。振り返りタイムで、このことを話題にすると、F児が一つの衣装でさまざまなアニメのキャラクターやプリンセスになったりしていることを副担任から聞き、A児にF児の様子を伝えることにした。A児は、F児の遊び方を聞き、納得したようだった。その後も、F児は外から花を摘んできては自分の衣装にセロテープで貼り付けるなど、思い付いたことを試していた。いつも目につくところに衣装をかけておいたことから、思い出しては身に付け、その都度、さまざまな役になっていた。ハロウィンの時期になると、5歳クラス児から教わったジャックオーランタンの飾りを付けたり、魔法のステッキをつくって魔女になりきったりしていた。なりきたいものを意識して飾りを工夫したり、出来上がったものを着てなりきってごっこ遊びをしたりと、ごっこ遊びと製作遊びがつながるようになっていった。同じキャラクターになって一緒にごっこ遊びをする中で、イメージを共有できるようになり、お互いの衣装の飾り付けを手伝う姿も見られた。その後も「つくっては着る、着てはつくる」を繰り返しながら、さまざまな幼児が衣装にかかわる遊びを続けていた。

11月18日

前日まで、A児B児と一緒に積木で腕輪を売る店をつくったり、スズランテープと折り紙でつくった飾りを壁などに貼って店の飾り付けをしたりしていたJ児。この日は、C児G児とままごとコーナーでままごとをしている。

副担任：「今日も腕輪屋さんはオープンするの？」

J児：「ううん。今日はパーティーをするんだよ」

副担任：「パーティーかあ、おもしろそう」

J児：「まずはご飯とデザートをつくろう」

J児と側にいたC児G児がままごとコーナーで料理づくりを始める。

J児：「あと、パーティーだから踊りたい」

C児：「いいね。じゃあ、ステージつくろう」

G児：「ドレスも着る？」

3人とも自分の衣装を持ってきて着る。

G児：「この積木を使ったらいいんじゃない？」

J児：「うん。そうする」

3人で、細長いウレタン積木を2つ並べてステージに見立てる。

A児：「いーれーて」A児も衣装を着て、やってくる。

C児J児：「いいよ」

J児：「まだ狭いよ」ステージに見立てたところに正方形の積木をいくつか並べて、ステージを大きくする。

広くなったステージにC児が上がり、ドレスの裾を少し持ち上げてお辞儀をする。次に、A児が上がる。

K児B児もやってきて仲間に加わり、衣装を着る。

K児：「椅子も並べたらいいんじゃない？」椅子を並べて客席をつくり始める。

K児の椅子の並べ方に納得がいかないC児J児が「そうじゃない」と言いながら、椅子を並べ直す。

J児：「もう踊っちゃおう」椅子の並べ方でもめている様子を見て言う。

まだ準備は終わっていないが、J児の言葉で誰が最初にステージに上がるかお互いに尋ね合う。

C児：「私、最初がいい」

A児：「じゃあ、Cちゃんが最初ね。その次、私ね。私の次は、Kちゃんね。いい？」それぞれが最初にステージに上がりたい中、C児の発言を聞き入れ、A児が周りの幼児に確認しながら順番を決めていく。

順番が決まると、それぞれが自己紹介して好きな歌を披露していく。全員がステージに上がると、次は友達と一緒に上がって、歌を歌う。

K児：「そうだ！マイクつくろうっと」製作コーナーで新聞紙を丸めたものをトイレットペーパーの芯に付け、マイクをつくる。

それを見て、B児G児も同じようにつくる。マイクが出来上がると、それを手に持ってステージに上がり、ショーを続ける。

これまで、衣装を目に見えるところに掛けておいたことで、ごっこ遊びをするときには衣装を着たりアクセサリをつくったりするなど、衣装にかかわる製作や遊びは続き、すっかり遊びの中に定着していた。特におうちごっこやお店屋さんごっこをするときには、衣装を身に着けてその役になりきって遊んでいた。前日まで、J児は腕輪屋さんという、これまでのアクセサリづくりの経験を活かしたお店を開き、その店構えにこだわっていた。この日になって突然、「パーティー」という言葉が聞かれるようになった。前日に店の飾

り付けをしていて、パーティーの飾りをイメージしたのかもしれない。「パーティーだから踊りたい」という言葉がきっかけとなって、G児はドレスとして衣装を着ることを、C児はステージをつくることを思い付く。そして、「パーティー」から一気に「ショー」のようなイメージへと遊びが広がっていった。他の幼児もJ児G児C児の「ショー」のイメージを共有できたのか、客席づくりが始まった。思いの食い違いはあったものの自分たちで遊びを進めていた。振り返りタイムでは、J児の発想から一気に遊びが広がったことが話題になった。これまで3歳クラスでショーごっこのような遊びは見られていなかったが、披露する人と見る人がいるというイメージをもって場をつくることができた背景として、4歳クラス児の縄跳びショーにお客さんとして参加したことが大きかったのではと話し合った。ショーを披露する人と客として見る人の役割を自然と遊びながら経験し、自分たちの遊びにもそれが活かされたのだろう。明日以降もこの遊びが続くと考え、これまで少し高いところに掛けていた衣装をいつでも自分たちで衣装を手にとれるようハンガーラックに衣装を掛けることにした。

11月19日

朝の支度が終わると、A児C児K児がさっそく衣装を着て、ステージづくりを始める。B児G児F児J児も次々と加わり、ステージも客席もすぐに出来上がる。昨日つくったマイクをもち、最初にB児G児K児がステージに上がる。そこに5歳クラスA児がやってくる。
5歳クラスA児：「何やってんの？」3歳クラス副担任に声をかける。
副担任：「ショーだよ」
5歳クラスA児：「ふーん」3歳クラス児が歌っている様子を眺める。
「ちょっと待ってて」そういうと3歳保育室を出て行く。
しばらくしてから、5歳クラスA児が「お客さん連れてきたよ」と数名の幼児とともに戻ってくる。やってきた5歳クラス児たちは客席の真ん中に座る。ステージにA児F児が上がっていたが、突然現れた5歳クラス児を見て恥ずかしくなり、歌が止まる。
5歳クラスB児：「恥ずかしくないよ。大丈夫だよ」そう言うと一緒に歌って励ましてくれる。
他の5歳クラス児も手拍子をして一緒に歌ってくれる。A児F児も恥ずかしそうだが、また歌い始める。
ハンガーラックに掛けたことにより自分たちのタイミングで衣装を脱いだり掛けたりできるようになり、さっそく衣装を着てショーごっこが始まった。5歳クラスA児は、これまで一緒に虫捕まえをしてくれるなど、3歳クラス児が頼りにしている幼児だった。ひょいと現れた5歳クラスA児が「ちょっと待ってて」と言って、他の幼児を客として連れてくることは副担任も想像していなかった。そして、興味をもって見に来てくれた5歳クラス児が3歳クラス児の恥ずかしいという気持ちに気付き励ましてくれる様子に感動した。「お客」という立場もしっかり理解し、3歳クラス児より大きい声では歌わずそっと支えてくれるように一緒に歌っていた。「みんなの前で歌うのって恥ずかしいんだよね。私もそうだよ」と声をかけてくれた5歳クラス児もいた。その姿や言葉から、年下の幼児への思いやりとともに、自分たちも同じ経験をしてきたからこそ共感して励ますことができるようになった「育ち」を感じた。3歳クラス児にとっては、予想もしていなかったお客がたくさん来てくれたことで、恥ずかしいという思いはありながらもこの遊びの楽しさをより味わうことができた。当初は同じクラスの友達とやっていたが、年上の幼児が自分たちの遊びに来てくれたこと、さらに一緒に歌って励ましてもらったことがとても嬉しかったようだ。こうしたかかわりが見られたのは、春先からのかかわりの積み重ねと言えよう。このことがきっかけとなり、3歳クラス児は翌日もショーごっこを始める。そして、ステージと客席の準備ができると、自分たちからお客として5歳クラス児を呼びに行き、自分たちのステージを見てもらう喜びを味わっていた。

考察

A児は、最初のこにこデーのときには「衣装を着たい」と言っていた。新学期が始まってからは「衣装をつくりたい」という思いに変わった。教師は、A児の気持ちの変化を捉え、ただ衣装を着ることではなく、「つくりたい」という思いを支えようとした。年上の幼児から衣装づくりを教わる場を用意しようとした背景には、年上の幼児から教わる、言ってみれば年上の幼児はモデルになるという経験をしてほしいという3歳クラス担任・副担任の願いがあった。そのことを4歳クラス担任・副担任に事前に伝え、場や状況を想定していたことがA児たちへのスムーズな援助につながったと考える。さらに、その後の振り返りタイムでも、双方の幼児にとってそれぞれどのような経験になったかを共有していたことも大きかった。保育の方針を確認していたことにより、遠慮せずに4歳保育室に通うことができ、3歳クラスの教師であっても4歳クラスの教師であっても幼児に対して同じように援助することができた。それが3歳クラス児の「困ったらいつでもやまさんにきける」という安心感につながり、自分たちで衣装をつくる自信となったと考える。年上の幼児に頼らなくても自分たちでつくれるようになったことにより、自分たちのつくりたいときにつくれるようになり、さらにはつくりたい友達に方法を教えながらかかわりも広がっていった。また、腰にスズランテープを巻くとよりドレスらしく見えるという、4歳クラス児の遊びの経験から得たことも教えてもらうことが

できた。これは幼児同士のかかわりだからこそ見られた姿であろう。

衣装がつくれるようになると、つくることが目的ではなくなり、衣装に飾り付けをしたりアクセサリーをつくったりと遊びが広がった。そのため教師は、適度な大きさの、中央が開くタイプの箱を集めたりスズランテープの色の種類を増やしたりして、幼児のつくりたい、飾りたいという思いを支えてきた。春先からコロナ禍のため屋外中心の保育となり、製作遊びの環境がなかなか整えられずに苦慮してきたが、衣装づくりがきっかけとなって製作遊びやごっこ遊びへの興味も膨らみ、遊びの幅が広がった。同じものを製作し、ごっこ遊びをする中で、イメージを共有しやすくなり、つくったものを使って一緒に遊ぶことも増えた。そのため、衣装は幼児の遊びの大事なアイテムとなり、教師も衣装の掛け方について見直している。一緒に遊ぶことが増える中で、言葉でのやりとりも増え、遊びに加わる友達も増えた。思いの食い違いからトラブルも起きたが、教師がそれぞれの思いを仲介しながら、トラブルがあっても遊びを続けられるようになっていった。

その後、ショーごっこへと遊びがさらに広がっていくが、常時、衣装が見えたり、いつでも着られたりできる環境になったことも遊びの広がりを支えた要因と言える。そして、ショーごっこに客としてきてくれた5歳クラス児の存在もこの遊びが続くきっかけとなった。客として友達を呼んできた5歳クラスA児の行動は予想できなかったが、教師は、材料や道具などの準備とともに、幼児の困り感や必要感を捉えて年上の幼児につなぐための援助も日頃から心がけている。3歳クラス児にとって年上の幼児の存在は大きい。それは、ただ方法や遊び方を教えてもらい遊びを広げていくきっかけになるだけではなく、モデルとしての存在でもあり、経験をつなぐという意味もある。A児たちが、自分たちの遊びを思い切り楽しむとともに、自分たちもしてもらったように、いずれは年下の幼児にしてあげようという気持ちがもてるようにと願いながら、教師が年上の幼児とのかかわりを意識していくことは幼児の育ちにとって大きな意義があると考えている。

<3歳クラス Ⅲ期 9～11月> 「年上の幼児とのかかわりから遊びを広げる」

これまでの保育の様子

夏季休業中の8月下旬に、園開放を兼ねた「にこにこデー」を開催している。そこにやってきたA児が、4歳クラスにカラービニール袋でつくった衣装が並んでいる様子を見て、「それが着たい」と3歳クラス担任に話す。しかし、通常の保育とは違う日だったため、A児は衣装を着ることは叶わなかった。コロナ禍により、屋外での遊び中心の保育となり、年上の衣装づくりや衣装を使ったごっこ遊びに触れる機会が少なかったが、担任は、この機会にA児がカラービニール袋の衣装に興味をもったことは、新学期に新しい遊びに触れるよいきっかけになる¹⁾と考えた。副担任と相談して、保育室テラスにテーブルと材料を用意し、製作ができる環境を整えることにした。²⁾

新学期が始まり、衣装のことを思い出したA児は、担任に「あのドレス、つくりたい」と伝えた。担任と誰に教えてもらおうか相談していると、A児は、衣装がかかっていた4歳クラスの幼児ではなく、いつも声をかけて遊び道具と一緒につくってくれる5歳クラス児に教えてもらいたいと言い、担任とともに5歳保育室に出かけた。A児は、自分で「ドレス、つくって」と5歳クラス児に伝えたものの、5歳クラス児も夢中になってつくっているものがあり、「いいよ。これをつくったら教えてあげる」と言われる。A児は、その言葉に納得し、5歳クラス児から声をかけられるまで待つことにしたが、その日は声がかからなかった。2日後、5歳クラス児が「Aちゃんに頼まれていた衣装、今ならつくれるよ」と3歳保育室に現れたが、A児は他の遊びをしており、タイミングが合わなかった。

その頃、4歳保育室前のテラスで製作遊びをする4歳クラス児の姿を見かけることが多くなった。3歳クラス担任は、その様子を見て、A児が再び衣装づくりをしたいと言っているのではないかと思い、製作遊びの援助をしていた4歳クラス副担任にA児が衣装づくりを教わりに行くかもしれないということを伝えていた。³⁾

9月30日

A児：「禰豆子の衣装をつくりたい」2日前から、紙を筒状にしたものをつくって口にくわえ、アニメのキャラクターになりきっていたA児が教師のところに来说う。
担任：「禰豆子の衣装ね、分かったよ。でも、先生、つくり方が分からないんだけど、どうしよう？」
A児：「うみさんのところに行く」
担任：「そうだね。この間、そうしたもんね。そういえば、さっき、やまさんがお部屋の前で何かつくってたよ。もしかしたら教えてもらえるかもしれないね」
A児：「じゃあ、やまさんに行ってみる」
担任：「分かったよ。じゃあ、Aちゃん、袋を持って行こう。何色がいい？」
A児：「んー、黄色がいい」
担任は、教材室から黄色のカラービニール袋を出し、A児に渡す。
A児：「ありがとう」
そのやりとりを近くで見ていたB児C児も「私たちもつくりたい」と言う。担任がビニール袋の色を尋ねると、それぞれピンクと紫色を選ぶ。3人はカラービニール袋を持ち、担任とともに4歳保育室に向かう。
担任：「あのね、やまさん。やまさんにお願ひがあつて来たの。聞いてくれる？」4歳保育室前のテラスで製作をしていた幼児に声をかける。
4歳クラス児：「いいよ。なあに？」A児たちを見る。
担任：「Aちゃん言える？」
A児：「…あのね…禰豆子の衣装がつくりたい…」小さい声で言う。
担任：「このビニール袋で衣装をつくりたいんだけど、そらさんはつくり方が分からないの」

コメントの追加 [o1]: 4歳クラス副担任に「A児が衣装をつくりに行くかもしれない」と知らせた背景には、A児自身が自分の思いを実現することを支えるために、同じような経験をしてきた年上の幼児から教えてもらおうという意図が3歳クラス担任にあった。幼児同士のかかわりの中で育てようとする3歳クラス担任の意図を4歳クラス副担任も理解し受け入れたからこそ、この場が整い、3歳クラス担任がいなくても4歳クラス副担任は同じ思いで幼児に対応していたと考える。教師同士が連携して同じ思いで援助することにより、つくれるようになりたいという自ら育とうとする力を年上の幼児とのかかわり（コミュニケーション）を通して育むことにつながると考えている。一人の幼児の育ちを教師全員で支えている。

コメントの追加 [o2]: 幼児に考えさせる教師の問いかけにより、幼児自身が考え自己決定していく。自分で決めたことで納得や自信につながり、意欲的に遊ぶ。この問いかけに対する共感、日々の保育の中で幼児のそうした姿を大切にしていると言える。

¹⁾ 教師がやらせたいわけではない。選択肢が広がることを期待している(c)、幼児の姿から環境構成を見直している(e)

²⁾ 屋外中心の保育から少しずつ室内の遊びも取り入れていくためのよいきっかけとなった(b)

³⁾ 遊びの様子から、その後の幼児の姿を予想し、事前に援助できるよう環境を整えている(b)、あらかじめ伝えておくことで連携が図りやすくなる(e)、事前に伝えておくことで4歳クラスの教師も3歳クラスの教師と同一ような援助をすることができた(f)

⁴⁾ 幼児自身がどうするか決定できるように働きかけている(b)、幼児自身が考える言葉かけ(e)、教師が教えるのではなく、どうしたらよいかを幼児に考えさせている(f)

⁵⁾ 教師がおしえるのではなく、年上の幼児に教えてもらうことを伝える。幼児同士をつなげる。伝承(c)、選択肢を示し、やりたいことが実現できるように支えている(e)

⁶⁾ 本人に色を選ばせている(g)

⁷⁾ 教師が先導しない。あくまでも支援。主体は幼児(c)、A児が自分で気持ちを伝えられるように援助することがかかわることにつながる(e)

4歳クラス児：「いいよ。私、つくり方知ってる」

担任：「いいの？ありがとうございます！Aちゃん、教えてくれるって。よかったね」

A児：「うん。ありがと」先程より大きい声で言う。

4歳クラス児は、A児が持っていたカラービニール袋を受け取ると、近くにあったマジックで首と手を出す部分に印を付け始める。印を付け終わると、はさみで印の通りにビニール袋を切り取っていく。3人は、その様子をじっと見ている。

4歳クラス児：「はい、できたよ。次は誰？」

4歳クラス児は、つくり方を知らせながら衣装をつくっていく。できあがるたびに一人ずつ着せてくれ、ある程度の長さに切ったスズランテープをお腹のところで縛ってくれる。3人は、お礼を言って保育室に戻り、副担任に衣装を着た姿を見せる。

A児：「やまさんにつくってもらったんだよ！」笑顔で言う。

副担任：「**うわあ、すてきだね。よく似合っているよ⁸⁾**」

A児：「外行こう」

A児がB児C児を誘い、衣装を着たまま、園庭や園舎裏などを回る。

にこにこデーからA児が抱いていた衣装を着たいという思い。思いの強さは日や遊びによって変化したものの、その思いはずっとA児の胸の内にあった。教師にどのような援助ができるのか考えたとき、教師と一緒につくることより、衣装を着て遊んだ経験のある年上の幼児から教わることが幼児のさまざまな経験につながるのではないかと話し合い、副担任と相談してその場を用意することとしていた。担任はA児の思いを支えようと、5歳保育室と一緒に行く。そこでA児は、いつもなら恥ずかしがって教師が代弁するところを、自分から「つくって」とお願いしていた。5歳クラス児の遊びもあるため、A児の思いは叶わなかったが、5歳クラス児の言葉にA児が自分の気持ちに折り合いをつける様子を見て、**担任は次にA児から言い出すタイミングを待つことにした。**⁹⁾5歳クラス児もA児との約束を覚えていて、忘れずに声をかけにきてくれた姿から、年下の幼児を思いやる気持ちを感じた。異年齢の幼児とのかかわりを通して、自然と年下への責任感や思いやり、年上への尊敬や憧れといった気持ちが育つことを実感する。¹¹⁾しかし、5歳クラス児の遊びが広がっていく様子を見て、その合間を見て衣装づくりをお願いすることの難しさを感じていた。ごっこ遊びが盛り上がり上っていた4歳クラスで、担任と副担任が衣装のことを話題にしていたことを知り、**4歳クラス副担任にA児が衣装づくりを尋ねに行くかもしれないことを相談すると、快く受け入れてくれた。**この一連の流れは、振り返りタイムで3歳クラス副担任とも共有していた。¹²⁾

5歳クラス児とのタイミングが合わなかったA児は、その後、しばらくアニメのキャラクターになるための道具をつくっていた。「禰豆子だよ！」と、つくったものをキャラクターのようにくわえて遊ぶうちに、キャラクターになりきることと衣装を着ることがA児の中でつながったのだろう。再び「衣装をつくりたい」と担任に伝える。担任は、A児の思いを受け止めながら、**4歳クラス児から教えてもらおうという方法を提案し¹³⁾**、今度こそA児の思いが実現するように働きかけた。1ヶ月近く抱いていた思いが実現したA児の表情はとても嬉しそうだった。スズランテープを腰で縛ってドレスのようにするのは4歳クラス児のアイディアである。これまでの衣装を着て遊んできた経験が感じられた。A児に請われるがまま、教師が衣装をつくったらスズランテープを腰に巻くところまではしなかった。4歳クラス児に尋ねに行ったからこそ、遊びの中で培われたアイディアを教えることができた。そして、当初「**禰豆子の衣装**」だったのが、黄色い色やドレスのような膨らみから「**プリンセスのベル**」へとイメージを膨らませていった。振り返りタイムでは、副担任が衣装を着て歩いていたA児の名前を呼ぶと「私、ベルだよ」と応えるほどキャラクターになりきっていたことが話題になった。また、この日、4歳クラス担任・副担任ともこのことについて振り返った。4歳クラス担任は、**4歳クラス児にとっても「衣装をつくる」という新たな遊びの視点が得られたことや年下の幼児にしてきたことを伝えるという経験ができたことは今後の遊びに生きてくと語り、双方にとって意義があったのではないかと話し合った。**¹⁴⁾

コメントの追加 [a3]: 教師から言われてではなく幼児から言い出すのを待つことで、幼児の主体性を大切にしているという指摘が多かった。もしかしら教師が誘う方が早いと考えられるかもしれないが、本園では、それよりも幼児が自ら動き出すことがその後の遊びに向かう思い入れが違ってくることを実感として得ており、その姿勢を大切にしている。

コメントの追加 [a4]: 最初はA児の思いを支えることがメインとなっていたが、その場面を3歳クラス教師と4歳クラス教師で振り返ったときに、双方の幼児にとって意味があったことを確認した。より多くの教師で援助の場面を語り合うことは、援助の意義や効果を確認することになり、そのよさに共感する教師が多かった。それにより、今後、自分が援助する際のレパトリーが広がっていくことも考えられる。

⁸⁾ A児の嬉しさに共感し、満足感につなげている(e)

⁹⁾ 年上の幼児から遊びが伝わる。そして伝える伝承(c)、衣装をつくることの幼児にとっての価値を多面的に考えている(e)

¹⁰⁾ 教師から言われてではなく、“自分から言い出したタイミング”だったことで、衣装に対する思いがより強くなった(b)、すぐに促さない。幼児のタイミングに合わせる(c)、幼児の主体性を大切にしている(e)、タイミングが合わなかったら自分が教えていたかもしれない。3歳クラス担任は、4歳クラス児の遊びの様子も視野に入れながらA児の気持ちに寄り添った心にゆとりのある援助だと感じた(f)、A児自らが言い出してくるのを待つ姿勢(g)

¹¹⁾ 遊びの中で自然と異年齢のかかわりが生まれ、育っている(b)

¹²⁾ クラスを超えた情報共有が援助につながっている(b)、すべての職員で幼児の育ちを支えている(e)

¹³⁾ 年上の幼児から教えてもらう場の設定(提案)(g)

¹⁴⁾ クラスを超えた情報共有により、異年齢のかかわりで生まれたよさを互いに確認できている(b)、新たな遊びの視点は、教師出発ではなく幼児伝承(c)、他クラスの教師との共有(g)

10月1日

B児はハンガーに掛けておいた衣装を製作テーブルのところに持ってくると、折り紙に絵を描いたものを胸の部分に貼る。A児C児は、衣装を着る。

A児：「ここにこれを巻きたい」昨日、4歳クラス児に巻いてもらったスズランテープを持って来る。

副担任：「お腹に巻くの？」

A児：「うん」

B児C児も同じように巻いてもらう。

D児：「私もあれをつくりたい」C児の衣装を指さして言う。

副担任：「**いいよ。Cちゃんにどうやってつくったのか聞いてみたらどうかな?**」¹⁵

D児：「どうやってつくったの？」

C児：「やまさんにつくってもらったんだよ。Dちゃんもつくってもらったらいいんじゃない？」

副担任：「**Dちゃんもやまさんに行きに来てくる?**」

D児：「うん。そうする」

E児：「僕も行く」D児と副担任のやりとりを見て言う。

2人ともピンクのカラービニール袋を選び、副担任と一緒に4歳保育室へ向かう。

D児：「わたしも服をつくりたいの。教えてください」製作をしている4歳クラス児に向かって言う。

E児：「僕も」

副担任：「やまさん、そらさんに教えてくれる？」

4歳クラス児：「いいよ。ちょっと待ってて」

D児E児：「ありがとう」

副担任：「**やまさん、ありがと。やまさんのおかげだね**」¹⁶

昨日とは違う4歳クラス児も加わって、首と手の部分に印を付け始める。その部分をはさみで切っていく。その様子を側で見ていた2人は、できあがったものを受け取り、お礼を言って部屋に戻る。

D児：「どうやって着るの？」

よく見ると、カラービニール袋の輪の部分ではなく口の部分を切ってあったため被ることができない。

副担任：「あれ、ほんとだね。どうやって着るんだろうね。もう一度やまさんに行って、教えてもらおうか」

3人は副担任とともに4歳保育室に行く。切った部分が違っていることに気付いた4歳クラス児がもう一度つくり直して着られるようにしてくれる。

保育室に戻ると、C児は花紙を丸めたものをいくつもつくり、衣装の裾にセロテープで貼り付けている。

A児は、厚紙でつくったお面ベルトを頭にはめ、腕には白いコピー用紙を輪っかにしたものを付けている。

副担任：「**いっぱい飾りが付いたね。すてきだね**」¹⁷

C児：「私たち、プリンセスなの」

副担任：「すてきね」

F児：「私もつくりたい」A児たちといた副担任に言う。

A児：「じゃあ、やまさん行く？」

F児：「うん」A児とともに4歳保育室に向かう。

A児：「Fちゃんもつくってほしいんだって。つくってください」4歳保育室前のテラスで製作をしていた4歳クラス児に言う。

4歳クラス児：「いいよ。どのペンにする？」印を付けるペンを選ばせてくれる。

4歳クラス児がつくる様子を近くでじっと見ているA児とF児。できあがると、2人で3歳保育室に戻り、F児も衣装に飾り付けを始める。

これまでカラービニール袋の衣装を着るという発想がなかった3歳クラス児にとって、A児を始めとするB児C児の衣装はとても魅力的に見えた。**同じようにつくりたいという幼児に、教師だけでなくA児やB児が4歳クラスに行くとき教えてもらえることを知らせたり、あるいは一緒について行ったりしていた。4歳クラス児は、3歳クラス児が行くと、印を付けるペンや腰に巻くテープを選ばせてくれた。**¹⁸まるで仕立屋のように丁寧に対応してくれる様子から年下の幼児に優しくしようという気持ちが感じられた。4歳クラス児の遊びによって衣装づくりを断られることもあったが、**3歳クラス児は5歳クラス児だけでなく4歳クラス児も頼りになることを実感した。**¹⁹また、こうしたやりとりを経験している幼児は、4歳クラス児の姿を真似て

¹⁵ とにかく幼児同士をつなげる。教師がじゃばらない(c)、幼児同士のかかわりを大切にしている(e)

¹⁶ 4歳クラス児の自己有用感につながる言葉かけ(e)

¹⁷ 幼児がしていることを価値付け、意欲を支えている(e)、

¹⁸ 年下の幼児は分からないことを教わったり方法を知ったりし、年上の幼児はやり方を伝えたり思いやりをもって接したりすることから、お互いにより経験となっている。改めて異年齢のかかわりによって育まれる力はたくさんあり大切だと感じた(f)

¹⁹ これまで5歳クラス児に頼ることが多かった3歳クラス児に4歳クラス児の存在を知らせたことで、異年齢のかかわりが広がった(b)

自然と友達にも教えてあげられるようになるのだろう。副担任は、根気強く対応してくれた4歳クラス児にお礼を言い、保育室では4歳クラス児のおかげで衣装ができたことを感じられるような言葉をかけるようにした。²⁰

A児たちは、それぞれの発想を活かして、衣装に飾りを付け始め、よりその子らしさが表れるようになった。花紙を丸めたり、折り紙に絵を描いたりして衣装に貼り付ける幼児や衣装の他に冠や腕輪をつくる幼児もいた。衣装を着て「プリンセスなの」と言っていたように、本物のプリンセスのように自分を着飾っていくという新たな楽しみも出てきた。「プリンセス」という言葉が幼児のイメージをより具体化することになり、教師にほしい材料やこうしてほしいという願いを言葉で伝えていた。A児の「衣装をつくりたい」という思いがカラービニール袋の衣装の原型を手に入れることにつながり、その後の飾り付けやなりきりへと遊びが広がっていく様子が伝わってきた。いつものように花紙、折り紙、白いコピー用紙、スズランテープ、布ガムテープ、セロテープなどを出していたが、この日は副担任がお面ベルトも用意していた。振り返りタイムでは、今後、アイテムづくりや飾り付けの材料の種類を増やすことを確認した。それぞれがつくった衣装は、名前のついたハンガーに掛け、幼児の見えるところにぶら下げておくことにした。²¹

10月5日

A児C児がさっそく自分の衣装を副担任に取ってもらい着る。A児は、衣装をロングスカートのようにはいている。そこにH児がやってくる。

H児：「僕もつくりたい」A児たちに向かってつぶやく。

A児：「じゃあ、やまさんに行く？」

H児はA児と副担任と一緒に4歳保育室に行くが、4歳クラス児が他の遊びをしていたため断られる。

副担任：「そらさんにもつくり方を覚えている友達がいるかな？」

C児：「つくりたいの？いいよ。もう私たち分かるから」

F児：「教えてあげようか」²²

A児：「じゃあ、先生からもらってきて。何色がいいの？」副担任のところにカラービニール袋をもらいに行くように促す。

H児が副担任からピンクのカラービニール袋をもらってくると、A児たちがテーブルに広げて、印は付けずにはさみで首と手の部分を切り取る。他の幼児もその様子を見守る。できあがると、F児たちに着せてもらい、C児からスズランテープを腰に巻いてもらう。H児ははにかみながら、お礼を言う。

2日間、4歳保育室に通ってつくり方を間近で見えていたからか、A児C児F児は自分たちで衣装の原型をつくれるようになった。「もう私たち分かるから」という言葉に自信がうかがえる。おそらく困ったら「やまさんに教えてもらおう」と4歳保育室に行くのだろう。副担任もそのように声をかけるつもりだった²³。振り返りタイムでは、ほとんど4歳クラス児に衣装をつくってもらっていたので自分たちでつくれるのだろうかと思っていた教師は、自分たちの読み取りが浅かったことを反省した。幼児は、幼児同士のやりとりの中でさまざまなことを感じ取りながら、自分ができると思ったタイミングで挑戦し、少しずつ世界を広げていくのだと感じた。また、A児C児F児は、自分たちが4歳クラス児にしてもらったように、H児に同じことをしてあげていた²⁴。教師に一切頼ることなく、H児の衣装をつくっていく姿はどこか誇らしげで、できあがった喜びをみんなで共有している雰囲気がとてもよかった。自分たちが4歳クラス児からしてもらったことが嬉しかったのだろう。してもらって嬉しかったことをしてあげるという姿を見て、年上の幼児から年下の幼児へと「行為」がつながるとともに「してもらって嬉しい」という気持ちもつながっていくのだと実感した。本園では、日々の保育の中で異年齢のかかわりが当たり前²⁵のように見られ、自然とつながりも育まれていく。それでもあえて教師が機を見て年上の幼児に聞きにいく場をつくることで、そうした行為や気持ちのつながりを捉えて、双方の幼児の自己有用感にまで高められるような援助ができる²⁶のではないかと考える。

翌日、翌々日と、C児A児F児が他の幼児の衣装を同じようにつくってあげていた。

コメントの追加 [05]: 年上の幼児から教わるのが難しい状況でも、教師は自分が教えるのではなく、経験のある幼児とつなごうとする。幼児は「もう分かる」と友達に教える中で、自信を深めていく。一方、教えてもらった幼児も自分のやりたいことが実現することによって、友達のよさを感じることができる。それが幼児の育っていく姿であり、教師の幼児同士をつなぐ援助によって、育ちを育んでいると言える。ここでは、教師が出過ぎることなく、友達とかわらせる援助を通して育ちを促がそうとする教師の心もちに共感した教師が多かった。本園においては、幼児同士のかかわりを通して、幼児自身の育ちを促すことを大切にしていると言える。

²⁰ 幼児同士をつなげるだけで終わらせない。それが広がるように、さらに声をかけ、つぶやき、気付かせていく(c)、年上の幼児への憧れや信頼感につながる言葉かけ(e)

²¹ 幼児の見える場所にあることで、興味が持続し、遊びが広がっていくきっかけになった(b)、幼児の姿をもとに材料や置き場所を見直している(e)

²² 年上の幼児に教えてもらったことを今度は自分たちが教えようとする姿(b)、同年齢の幼児同士もつなげる。やりたい幼児が自然と声をかけてくる(c)、友達同士のかかわりの中でやりたいことができるように言葉をかけている(e)

²³ 担任と同じスタンス(g)

²⁴ 年上のからのつながり(g)

²⁵ 当たり前のように異年齢のかかわりがあるからこそ、遊びの伝承が起きる(c)

²⁶ 年上の幼児とのかかわりが3歳クラス児の経験や遊びを広げた(b)

10月8日

F児は、ハンガーから自分の衣装を取ってもらい着る。A児とともに折り紙で身に付けるものをつくり始める。

F児：「先生、見て」つくったものを通りかかった教師に見せる。

担任：「**すてきなものをつくったね。バッグかな？**」

F児：「ううん、プレスレットだよ」

担任：「ああ、なるほど、プレスレットだねえ」

F児：「バッグもつくるよ」

担任：「**バッグもつくるの？Fちゃんすごいね²⁷**」

F児：「先生、何か箱みたいなの、ない？」

担任：「箱ね、ちょっと待ってね」教材室から大きさの違う箱をいくつか持って来てF児に見せる。

F児：「これがいい」縦、横20cm、幅5cm程の箱を選ぶ。そこにスズランテープを付け、肩からかけられるようにする。黄色の折り紙でハートをつくり、バッグに見立てた箱に貼る。

A児：「私もつくりたい。箱ちょうだい」F児がバッグをつくっている様子を見て担任に言う。

担任：「**どんな箱がいいの？**」

A児：「Fちゃんとおんなじの」

担任：「うーん、Fちゃんと同じ箱はないけど…似たような箱ならあるよ²⁸」F児に渡した箱と同じような大きさの箱を見せる。

A児：「それでいい」

担任：「よかった。はい、どうぞ」

A児：「ありがとう」F児がつくっていたように、スズランテープを付け、折り紙の飾りを付ける。

G児もF児A児と同じようにバッグをつくろうとするが、同じような大きさの箱はもうなくなってしまふ。

I児：「これでも物が入れられるでしょ」近くで、折り紙とスズランテープでバッグのようなものをつくっていたI児がつくっていたものをG児に見せながら言う。

G児：「ほんとだね」I児がつくっているものを見ながら、折り紙とスズランテープで同じようにつくり、肩からかける。

A児の衣装づくりから始まり、興味をもった幼児はだいたい自分の衣装をつくっていた。教師は、それらをいつでも手に取れるようにハンガーに掛けていた。この頃になると、自分の衣装の飾り付けを楽しみ、その日の気分に合わせて、おうちごっこのお母さん役やプリンセスになっていた。その中で、教師のやりとりから、F児が廃材を使ってバッグをつくることを思い付く。以前、副担任とも打合わせをしていたので、箱はさまざまな大きさのものをいくつか用意していたが、F児が選んだものは数が少なかった。G児が他の大きさの箱を選ぶかと思っていたら、I児の思いもかけない提案により、より身近な材料で入れ物をつくり、バッグに見立てていた。G児は、F児のような箱のバッグではなかったが、とても満足して、つくったバッグを身に付けていた。箱などの特別な材料がなくても、あるものでつくろうと思えばつくれることを経験した幼児²⁹によって、どんどんアクセサリやバッグ、ステッキ、冠などがつくられるようになり、幼児の間に少しずつ広まっていった。教師は、衣装をつくったことに満足するのではなく、そこからイメージを膨らませてアクセサリなどをつくる姿に遊びの広がりを感じ、必要に応じて材料を渡せるようにしていた。³⁰バッグなどが出来上がると、それらを身に付けて、「お店屋さん」になることもあった。次々になりたいものを変えてなりきる中で、A児が新しいアニメキャラクターになるために、違う色のカラービニール袋が欲しいと言ってくる。担任は、一度渡すと、他の幼児も次々に違う色のカラービニール袋を欲しいがらうと考え、渡すかどうか迷った。振り返りタイムで、このことを話題にすると、F児が一つの衣装でさまざまなアニメのキャラクターやプリンセスになったりしていることを副担任から聞き、A児にF児の様子を伝えることにした。³¹A児は、F児の遊び方を聞き、納得したようだった。その後も、F児は外から花を摘んできては自分の衣装にセロテープで貼り付けるなど、思い付いたことを試していた。いつも目につくところに衣装をかけておいたことから、思い出しは身に付け、その都度、さまざまな役になっていた。ハロウィンの時期になると、5歳

コメントの追加 [06]: 幼児の遊ぶ姿を見て、遊びに必要な材料を想像し準備している。しかし、それはすぐに遊びに使える出来上がったものではなく、折り紙や段ボール、箱などの素材と言えるものである。そうした素材を工夫してつくることによって、幼児の考える力や粘り強く取り組む力、そして自信が育つと考えるからである。本園では、どの教師もそうした幼児の姿を目の当たりにしていることから、この部分に共感できるのだろう。

²⁷ 幼児の思いを受け止めて、意欲の持続を支えている(e)

²⁸ 幼児が自分で考えて決める姿を大切にしている(e)

²⁹ “なればつくればいい”という幼児の姿(b)、必要以上に出さないことの裏付け(c)、“なかったらつくればいい”という言葉は5歳クラス児からもよく耳にする言葉である。ただたくさん物があればいいというわけではなく、あるものを工夫して使うことから試行錯誤する力が育まれている(f)、あるもので工夫する姿(g)

³⁰ 幼児の姿に合わせて材料を用意し、したいことができるように支えている(e)

³¹ “1着”を大切にすることに繋がった。“自分のドレス”という思いがより強くなる(b)、援助に迷うときもあるが、担任と副担任とで相談し、方向性を見出していくことを大切にしている(e)

クラス児から教わったジャックオーランタンの飾りを付けたり、魔法のステッキをつくって魔女になりきったりしていた。なりたいものを意識して飾りを工夫したり、出来上がったものを着てなりきってごっこ遊びをしたりと、ごっこ遊びと製作遊びがつながるようになっていった。同じキャラクターになって一緒にごっこ遊びをする中で、イメージを共有できるようになり、お互いの衣装の飾り付けを手伝う姿も見られた。その後も「つくっては着る、着てはつくる」を繰り返しながら、さまざまな幼児が衣装にかかわる遊びを続けていた。

11月18日

前日まで、A児B児と一緒に積木で腕輪を売る店をつくったり、スズランテープと折り紙でつくった飾りを壁などに貼って店の飾り付けをしたりしていたJ児。この日は、C児G児とままごとコーナーでままごとをしている。

副担任：「今日も腕輪屋さんはオープンするの？」
J児：「うん。今日はパーティーをするんだよ」
副担任：「パーティーかぁ、おもしろそう」
J児：「まずはご飯とデザートをつくろう」
J児と側にいたC児G児がままごとコーナーで料理づくりを始める。

J児：「あと、パーティーだから踊りたい」
C児：「いいね。じゃあ、ステージつくろう」
G児：「ドレスも着る？」
3人とも自分の衣装を持ってきて着る。
G児：「この積木を使ったらいいんじゃない？」
J児：「うん。そうする」
3人で、細長いウレタン積木を2つ並べてステージに見立てる。

A児：「いーれーて」A児も衣装を着て、やってくる。
C児J児：「いいよ」
J児：「まだ狭いよ」ステージに見立てたところに正方形の積木をいくつか並べて、ステージを大きくする。
広くなったステージにC児が上がり、ドレスの裾を少し持ち上げてお辞儀をする。次に、A児が上がる。
K児B児もやってきて仲間に加わり、衣装を着る。

K児：「椅子も並べたらいいんじゃない？」椅子を並べて客席をつくり始める。
K児の椅子の並べ方に納得がいかないC児J児が「そうじゃない」と言いながら、椅子を並べ直す。
J児：「もう踊っちゃおう」椅子の並べ方でもめている様子を見て言う。
まだ準備は終わっていないが、J児の言葉で誰が最初にステージに上がるかお互いに尋ね合う。

C児：「私、最初がいい」
A児：「じゃあ、Cちゃんが最初ね。その次、私ね。私の次は、Kちゃんね。いい？」それぞれが最初にステージに上がりたい中、C児の発言を聞き入れ、A児が周りの幼児に確認しながら順番を決めていく。

順番が決まると、それぞれが自己紹介して好きな歌を披露していく。全員がステージに上がると、次は友達と一緒に上がって、歌を歌う。

K児：「そうだ！マイクつくろうっと」製作コーナーで新聞紙を丸めたものをトイレットペーパーの芯に付け、マイクをつくる。³²
それを見て、B児G児も同じようにつくる。マイクが出来上がると、それを手に持ってステージに上がり、ショーを続ける。

これまで、衣装を目に見えるところに掛けておいたことで、ごっこ遊びをするときには衣装を着たりアクセサリーをつくったりするなど、衣装にかかわる製作や遊びは続き、すっかり遊びの中に定着していた。³³特におうちごっこやお店屋さんごっこをするときには、衣装を身に着けてその役になりきって遊んでいた。前日まで、J児は腕輪屋さんという、これまでのアクセサリーづくりの経験を活かしたお店を開き、その店構えにこだわっていた。この日になって突然、「パーティー」という言葉が聞かれるようになった。前日に店の飾り付けをしていて、パーティーの飾りをイメージしたのかもしれない。「パーティーだから踊りたい」という言葉がきっかけとなって、G児はドレスとして衣装を着ることを、C児はステージをつくることを思い付く。そして、「パーティー」から一気に「ショー」のようなイメージへと遊びが広がっていった。他の幼児もJ児G児C児の「ショー」のイメージを共有できたのか、客席づくりが始まった。思いの食い違いはあったものの自分たちで遊びを進めていた。振り返りタイムでは、J児の発想から一気に遊びが広がったことが話題にな

³² 教師が入らなくても幼児同士で遊びが発展し、様々なアイディアや工夫が出ている。やりたい思いがあふれている(g)

³³ 衣装をいつも目につくところに掛けておいたことで遊び道具の一つとなり遊びが続いた(f)、異年齢とのかかわりができている(g)

った。これまで3歳クラスでショーごっこのような遊びは見られていなかったが、披露する人と見る人がいるというイメージをもって場をつくることができた背景として、4歳クラス児の縄跳びショーにお客さんとして参加したことが大きかったのでは³⁴と話し合った。ショーを披露する人と客として見る人の役割を自然と遊びながら経験し、自分たちの遊びにもそれが活かされたら。明日以降もこの遊びが続くと考え、これまで少し高いところに掛けていた衣装をいつでも自分たちで衣装を手にとれるようハンガーラックに衣装を掛けることにした。³⁵

11月19日

朝の支度が終わると、A児C児K児がさっそく衣装を着て、ステージづくりを始める。B児G児F児J児も次々と加わり、ステージも客席もすぐに出来上がる。昨日つくったマイクをもち、最初にB児G児K児がステージに上がる。そこに5歳クラスA児がやってくる。
5歳クラスA児：「何やってるの？」3歳クラス副担任に声をかける。
副担任：「ショーだよ」
5歳クラスA児：「ふーん」3歳クラス児が歌っている様子を眺める。
「ちょっと待ってて」そういうと3歳保育室を出て行く。
しばらくしてから、5歳クラスA児が「お客さん連れてきたよ」と数名の幼児とともに戻ってくる³⁶。やってきた5歳クラス児たちは客席の真ん中に座る。ステージにA児F児が上がっていたが、突然現れた5歳クラス児を見て恥ずかしくなり、歌が止まる。
5歳クラスB児：「恥ずかしいよ。大丈夫だよ」そう言うと一緒に歌って励ましてくれる。³⁷
他の5歳クラス児も手拍子をして一緒に歌ってくれる。A児F児も恥ずかしそうだが、また歌い始める。
ハンガーラックに掛けたことにより自分たちのタイミングで衣装を脱いだり掛けたりできるようになり、さっそく衣装を着てショーごっこが始まった。³⁸5歳クラスA児は、これまで一緒に虫捕まえをしてくれるなど、3歳クラス児が頼りにしている幼児だった。ひょいと現れた5歳クラスA児が「ちょっと待ってて」と言って、他の幼児を客として連れてくることは副担任も想像していなかった。そして、興味をもって見に来てくれた5歳クラス児が3歳クラス児の恥ずかしいという気持ちに気付き励ましてくれる様子に感動した。「お客」という立場もしっかり理解し、3歳クラス児より大きい声では歌わずそっと支えてくれるように一緒に歌っていた。「みんなの前で歌うのって恥ずかしいんだよね。私もそうだよ」と声をかけてくれた5歳クラス児もいた。その姿や言葉から、年下の幼児への思いやりとともに、自分たちも同じ経験をしてきたからこそ共感して励ますことができるようになった「育ち」³⁹を感じた。3歳クラス児にとっては、予想もしていなかったお客がたくさん来てくれたことで、恥ずかしいという思いはありながらもこの遊びの楽しさをより味わうことができた。当初は同じクラスの友達とやっていたが、年上の幼児が自分たちの遊びに来てくれたこと、さらに一緒に歌って励ましてもらったことがとても嬉しかったようだ。こうしたかわりが見られたのは、春先からのかわりの積み重ね⁴⁰と言える。このことがきっかけとなり、3歳クラス児は翌日もショーごっこを始める。そして、ステージと客席の準備ができると、自分たちからお客として5歳クラス児を呼びに行き、自分たちのステージを見てもらう喜びを味わっていた。

考察

A児は、最初のこにこでーのときには「衣装を着たい」と言っていた。新学期が始まってからは「衣装をつくりたい」という思いに変わった。教師は、A児の気持ちの変化を捉え、ただ衣装を着ることではなく、「つくりたい」という思いを支えようとした。年上の幼児から衣装づくりを教わる場を用意しようとした背景には、年上の幼児から教わる、言ってみれば年上の幼児はモデルになるという経験をしてほしいという3歳クラス担任・副担任の願いがあった。そのことを4歳クラス担任・副担任に事前に伝え、場や状況を想定していたことがA児たちへのスムーズな援助につながったと考える。さらに、その後の振り返りタイムでも、双方の幼児にとってそれぞれどのような経験になったかを共有していたことも大きかった。⁴¹保育の方針を確

コメントの追加 [07]: 他のクラスの教師と幼児の育ちについて共有することは、幼児の姿や教師の援助を多面的に捉えることにつながり、今後の保育に活かすことができる。本園では、そうした情報共有と連携が教師全員で幼児の育ちを支えることにつながると考えていることが分かった。

³⁴ 年上の幼児の遊びからイメージを広げていく(b)、幼児の経験と育ちつつあるものを共有している(e)

³⁵ 自分たちで取れる位置にあることで自分のタイミングでやりたいときにやりたい遊びをすることができる(b)

³⁶ 5歳クラス児も、自分の経験から年下の幼児の気持ちに分かる(g)

³⁷ 年下の幼児の気持ちに寄り添い、優しく言葉をかける(b)

³⁸ したいときにすぐできる環境が幼児の主体性を支えている(e)

³⁹ 年下の幼児にしてもらったことを今度は自分たちがしてあげる。遊びだけでなく、思いも受け継がれている(b)、双方のクラスの幼児にとっての価値や育ちを捉えている(e)

⁴⁰ 1年のスパンで捉えている(c)

⁴¹ クラスを超えた情報共有をすることで、同じ思いで援助ができる(b)、異年齢のかかわりをカンファレンスによって共有することで、年上、年下両方の育ちを捉えることができる(c)、異年齢のかかわりを想定し、教師間で情報共有することが幼児のための連携につながる(d)、異年

認していたことにより、遠慮せずに4歳保育室に通うことができ、3歳クラスの教師であっても4歳クラスの教師であっても幼児に対して同じように援助することができた。それが3歳クラス児の「困ったらいつでもやまさんにきける」という安心感⁴²につながり、自分たちで衣装をつくる自信となったと考える。年上の幼児に頼らなくても自分たちでつくれるようになったことにより、自分たちのつくりたいときにつくれるようになり、さらにはつくりたい友達に方法を教えながらかかわりも広がっていった。また、腰にスズランテープを巻くとよりドレスらしく見えるという、4歳クラス児の遊びの経験から得たことも教えてもらうことができた。これは幼児同士のかかわりだからこそ見られた姿⁴³であろう。

衣装がつくれるようになると、つくることが目的ではなく、衣装に飾り付けをしたりアクセサリをつくったりと遊びが広がった。そのため教師は、適度な大きさの、中央が開くタイプの箱を集めたりスズランテープの色の種類を増やしたりして、幼児のつくりたい、飾りたいという思いを支えてきた。春先からコロナ禍のため屋外中心の保育となり、製作遊びの環境がなかなか整えられずに苦慮してきたが、衣装づくりがきっかけとなって製作遊びやごっこ遊びへの興味も膨らみ、遊びの幅が広がった。⁴⁴同じものを製作し、ごっこ遊びをする中で、イメージを共有しやすくなり、つくったものを使って一緒に遊ぶことも増えた。そのため、衣装は幼児の遊びの大事なアイテムとなり、教師も衣装の掛け方について見直している。一緒に遊ぶことが増える中で、言葉でのやりとりも増え、遊びに加わる友達も増えた。思いの食い違いからトラブルも起きたが、教師がそれぞれの思いを仲介⁴⁵しながら、トラブルがあっても遊びを続けられるようになっていった。

その後、ショーごっこへと遊びがさらに広がっていくが、常時、衣装が見えたり、いつでも着られたりできる環境になったことも遊びの広がりを支えた要因と言える。そして、ショーごっこに客としてきてくれた5歳クラス児の存在もこの遊びが続くきっかけとなった。客として友達を呼んできた5歳クラスA児の行動は予想できなかったが、教師は、材料や道具などの準備とともに、幼児の困り感や必要感を捉えて年上の幼児につなぐための援助⁴⁶も日頃から心がけている。3歳クラス児にとって年上の幼児の存在は大きい。それは、ただ方法や遊び方を教えてもらい遊びを広げていくきっかけになるだけではなく、モデルとしての存在でもあり、経験をつなぐという意味もある。A児たちが、自分たちの遊びを思い切り楽しむとともに、自分たちもしてもらったように、いずれは年下の幼児にしてあげようという気持ちがもてるようにと願いながら、教師が年上の幼児とのかかわりを意識していくことは幼児の育ちにとって大きな意義があると考える。⁴⁷

齢の職員とも情報共有を行う(g)

⁴² これがこのエピソードの最も中心となる要素ではないか(c)

⁴³ 教師のつなげる援助があつて初めて成り立つものではないか(c)

⁴⁴ コロナ禍で苦慮し考え続けてきたからこそ、衣装への興味をよりきっかけと捉え、援助につなげている(d)

⁴⁵ 支える＝幼児同士の橋渡し(c)

⁴⁶ タイトルにしてもよいほど、この言葉がすべて(c)、日頃から異年齢とかかわる価値をふまえて保育している(d)

⁴⁷ 互いにとってよい経験になる。してもらったことを「今度は自分たちが」とつながっていく(b)

＜3歳クラス IV期 1～2月＞ 「遊び出しを支えながら、お楽しみ発表会へ」

これまでの保育の様子

3学期が始まってすぐに記録的な大雪に見舞われ、1週間の臨時休園となった。冬季休業に続いて、思いがけず休みが長くなり、臨時休園が明けても、なかなか自分のしたい遊びを見付けられない様子が見られた。振り返りタイムでは、副担任とその状況を共有し、幼児のペースを大事にしながらも遊びの様子を見て積極的に援助していくことを確認していた。したいことを見付けられない幼児が遊びを見付けるきっかけをつくることができるよう、まずは廃材の種類や量を見直した。

休業が終わって3日後、出していた折り紙を使ってL児が魚をつくっていた。それを見ていたM児が白いコピー用紙を魚の形に切って魚に見立てる。二人は、それぞれが作った魚を床に置き、積木で池をつくり始めた。M児が、魚釣りをすることを思い付き、空き箱をつなげて釣り竿をつくっていた。この日の振り返りタイムでは、したいことを見付けて遊び出す姿が見られるようになったことや用意した廃材を使ってM児の新しい遊びが始まったことが話題になった。M児の様子からおそらく明日以降もこの遊びをするのではないかと思われた。そして、M児の姿が新たな遊びが始まるきっかけになったと考え、教師もM児と一緒に遊びながら様子を見守ることにした。

翌日もM児は、積木で池をつくり、そこにつくった魚を入れて魚釣りごっこを始めた。副担任は、おうちごっこをしている幼児とM児の間に入り、それぞれの幼児と会話しながら遊びの援助をしていた。M児は、この日も白いコピー用紙で魚をつくり、池に見立てた積木の中に入れていた。ずっとその遊びをしているわけではなかったが、その遊びを気に入っているようだった。振り返りタイムで、やはりM児がこの遊びを続けそうであることを確認し、積木で池をつくると毎回片付けることになることから、他のもので池をつくれるようにしたらどうかと話し合った。それにより、2月に行われるお楽しみ発表会の発表内容にもかかわってくるかもしれないことも話題になった。

1月22日

M児：「僕、お支度終わったよ」
担任：「おっ、早かったね。Mくん」
M児：「うん。僕、今日も魚釣りするんだあ」積木のところへ行こうとする。
担任：「Mくん、お池つくるの？」
M児：「うん。そうだよ」
担任：「いいねえ。そうだ、本当のお池みたいにつくってみる？」
M児：「え、どうやって？」
担任：「ちょっと待っててね」浅めの段ボールを持って来る。
「こんなのがあるんだけど、どう？」
M児：「うん、いいね！これでお池をつくろう」
N児：「あのさあ、お池はさあ、水色だよ。この中を水色にしたらお池みたいになるんじゃない？」側でM児と教師のやりとりを見ていたN児が言う。
M児：「え、どうやって？」
N児：「うーん…」しばらく考え込む。
担任：「水色ねえ…あつ、いいこと思い付いた！」教材室から水色のカラービニール袋を持って来る。
「これを段ボールの中に敷いたらどうかな」
M児：「いいねえ、いいねえ、そうしよう」跳びはねながら言う。
教師とM児N児で、段ボールの中にカラービニール袋を貼る。
M児：「お池みたいだね。そうだ、お魚を入れようつと」昨日までにつくった紙の魚を持って来て入れる。
「そうだ！もっとお魚つくろうつと」
担任：「いいね。まだまだいっぱい泳げそうだもんね」
M児：「うん！」
L児：「私もつくる」池づくりの様子を見たL児がやって来る。
L児は白いコピー用紙にクレヨンで魚の形を描き、それをはさみで切り取る。一つできると、さらにもう一つつくる。M児は釣り竿を入れて、魚を釣ろうとする。その様子を見てO児P児もやってくる。M児はL児とともに釣り竿に魚をつけて釣れるようにする。
M児：「僕も魚つくろうつと」白いコピー用紙を大きく切って魚に見立てる。
「これはマグロだよ」
担任：「そっかあ、マグロなんだ。他にどんなお魚がいるんだろうねえ…何を見たらお魚が載っているんだろうね？」
M児：「僕、知ってるよ」絵本コーナーに走っていく。

「うみ」の図鑑を見付けると、その場で図鑑を広げて教師やL児N児と一緒に載っている魚を見る。

M児：「そうだ、これ、お部屋に持って行く」

図鑑を保育室に持って行き、他の幼児と一緒にページをめくりながら、ウニやクジラ、マンボウなどを眺める。その後、M児はP児に釣り竿を貸して魚を釣らせてあげる。

この日もM児は池をつくるのに積木を使おうとしていた。これまで段ボールという材で遊んだことがなかったため、大きな場をつくるのに積木を使う幼児が多かった。そこで、担任は振り返りタイムでも確認していた通り、M児が池をつくろうとするタイミングで、遊びを残せるように持ち運びができる段ボールを提案しようと考えた。また、この機会に段ボールという新しい材料を提案することによって、幼児の材料の選択肢に加わればという思いもあった。その一方で、この提案により、幼児の遊びの方向を左右するのではないかと迷い、副担任に相談した。その結果、この日が金曜日で週末になるため、つくった池を残すことができれば週明けも遊びが続くのではないかと、提案することにした。M児は担任の提案を受け入れ、担任が新しい材料を持って来たことでN児L児も興味をもち、遊びに加わった。N児は“池”というイメージから、段ボールの中を青くすることを提案するが、N児M児ともにいい考えが思い付かないようだった。カラービニール袋の他にも、色を塗るか折り紙を貼るなどの方法が頭をよぎったが、カラービニールの衣装を着て遊ぶことが多かったことから材として身近なカラービニール袋を提案した。その後、L児も加わって遊びが広がっていく様子が見られた。しかし、この提案の仕方については、担任がいくつか提案して幼児自身が決めることができるように働きかければよかったと反省した。また、M児がこれまでも絵本コーナーで友達と一緒に「うみ」の図鑑を眺めている姿を目にしていたことから、M児が魚の種類を言い始めたタイミングで、担任は「何を見たら載っているのだろう」と問いかけた。友達と一緒にページをめくりながら、「これはクジラ」「サメもいる」などと話しじっくり眺めていた。その様子を見て、段ボールでつくった池と一緒に図鑑を保育室に置いた。振り返りタイムでは、今日の経緯を共有し、来週以降の様子を見ることにした。

1月25日

M児は、登園後の支度を終わると、副担任が様々な種類の廃材を出していた製作テーブルに行く。

M児：「僕、いいこと思い付いちゃった。先生、それ、ちょうだい」副担任がちょうど手にしていたトイレットペーパーの芯を指さして言う。

副担任：「いいよ。はい、どうぞ」

M児：「ありがと」トイレットペーパーの芯に折り紙を巻き、セロテープで留める。

「今日は、こんな形の魚だよ」副担任に見せる。

副担任：「Mくん、おもしろいこと思い付いたね」

M児：「えへへ、僕、考えたでしょう。お魚はしっぽがあるからしっぽも付けるんだあ」スズランテープを10cm程の長さに切って、つくった魚に付ける。その後、黒いクレヨンで目と口も描く。1つつくり終わると、同じ要領で何個かつくる。その様子を近くでQ児がじっと見ている。

M児：「Qちゃんもやりたいの？」Q児の視線に気付いたM児が言う。

Q児：「…」

M児：「ちょっと待っててね」白いコピー用紙を持って来て、それを筒状に丸め、30cm程の長さに切った赤いスズランテープを付ける。

「はい。Qちゃんのだよ」つくった釣り竿をQ児に渡す。

Q児は黙ったまま受け取る。M児は段ボールでつくった池を持って来て、自分がつくった魚を入れる。そして、M児はQ児が魚釣りをできるように渡した釣り竿の先にセロテープを輪にしたものを付ける。Q児M児と一緒に段ボールの中に釣り竿を垂らし、魚釣りを試みる。しばらく魚釣りをした後、二人で「うみ」の図鑑を眺める。

M児：「海をつくりたい」図鑑を見ながら言う。

副担任：「海かあ、いいね。どうやってつくる？」

図鑑のページを副担任に見せながら相談を始めたところで、片付けの時間になる。

創意あふれるM児は、副担任が手にしていたトイレットペーパーの芯を見て、本当に「いいこと」を思い付いたのだろう。これまで紙でつくった平面の魚が立体的な形へと変わり、顔やしっぽが付いてより本物らしくなった。週明けだったが、魚や魚釣りに対するM児の思いは切れていなかった。この日の振り返りでは、金曜日に相談した通りの姿が見られたことで援助に対する手応えを共有した。そして副担任は、黙々と釣り竿をつくっていたM児がてっきり自分のものをつくっていると思ったが、実はQ児のためにつくっていたことを見て驚いたと話していた。M児は、これまでも外で土を使ったチョコレートづくりを長期間に渡って黙々とやっていたことがあったが、ずっと一人だった。一人で試したいことややりたいことを自分が納得するまでやっており、友達を求めているなかった。他の幼児が興味をもって加わろうとすると、断りはしないものの途中で離れたり止めたりすることが多かった。それが、今回は、何も言わないQ児に対して自分から釣り竿をつくって渡し、自分の遊びに誘うようにしていた。副担任は、Q児の思いをM児なりに汲んで行動を起こ

した姿に成長を感じ、担任も同様の思いだった。また、Q児もこれまで自分から他の幼児の遊びに興味をもって近付くことが少なかった。友達を受け入れてかかわって遊ぶM児の姿、そしてM児の遊びに興味をもちかかわるQ児の姿を目の当たりにして、この遊びが続くことを願った。M児が図鑑を参考に「海をつくりたい」と言ってきたので、今回はホワイトボード3連板を提案することを確認した。

1月27日

登園後の支度を終わると、段ボールの池を保育室の真ん中に持って来て置く。集まってきた幼児に魚を見せたり魚釣りをさせてあげたりする。

M児：「海つくる」しばらくしてやって来る。

副担任：「そうだったね。どうやってつくろうか」

M児：「うーん」

副担任：「Mくん、ここにこういうのがあるよ」すぐ近くに置いてある3連板を持って来る。

M児：「うん。ここに青いのを貼る」

副担任：「分かったよ。青ね」教材室から水色のカラービニール袋を持って来る。

「これでいいかな？」

M児：「うん、それでいいよ」カラービニール袋を受け取ると、3連板の一面にセロテープで貼る。

「できた。僕、この魚をつくる」傍らに図鑑を置き、トイレットペーパーの芯に赤い折り紙を巻いて気に入っているサクラダイをつくる。できあがると、海に見立てたカラービニール袋の上に貼る。

「今度は、海だから潜水艦もつくろうっと」トイレットペーパーの芯を2個つなげて黄色とピンクの花紙を巻き潜水艦をつくる。サクラダイの近くに貼る。

図鑑を眺めながら黙々とつくっていたM児が図鑑を持って副担任のところにやって来る。

M児：「海には下に砂があるんだね」

副担任：「これは砂なんだね」図鑑を見ながら言う。

M児：「じゃあ、砂もつくらなくっちゃ」

副担任：「おもしろいね、いい考えだね。どうやってつくる？」

「これの茶色もあるよ」いつも材料コーナーに用意している黄色の花紙を見せる。

M児：「砂は大きいから、もっともっというね」

片付けの時間になり、担任が保育室に戻って来る。

M児：「先生、見て！ほら、海をつくったんだよ」

担任：「Mくん、すごいね。海もつくったんだね」

M児：「うん！」

朝の支度を終わると、毎日M児は段ボールでつくった池を保育室の真ん中に置いた。それにより、Q児などの他の幼児も集まってくる。この日M児は、前日やり残した海づくりをすぐに始めた。副担任も打合わせた通り、3連板を提案した。3連板を提案したのは、つくったものを残すことができ、さらに移動させることもできると考えたからである。M児が毎日必ず段ボールの池を持って来て短時間でも魚釣りをして遊ぶ様子を見てみると、お楽しみ発表会でこの遊びを見せるかもしれないと思ったため移動もできるようにしたかった。また、M児は毎日「うみ」の図鑑を眺めていた。次第に魚への興味も深めていき、「サクラダイ」「マンボウ」「イカ」などを気に入って、それらをつくるようになった。できた魚は海に貼ったり池に入れて釣ったりして自由に使っていた。池の中は魚が増え、自分が魚をつくっているときは他の幼児に釣り竿を貸して魚釣りをさせてあげるようにもなっていた。そして、連日いい具合に、片付け間際になる頃、次にこうしたいということが出てくる。それにより、M児の遊びへの思いが続くことになる。M児は、翌日カラービニール袋の底の方に黄色の花紙を貼って砂底をつくり、これで満足したのか、その後は寄ってきた友達と魚釣りをしては図鑑を見ることを繰り返していた。

1月29日

M児は登園の支度を終え、いつものように段ボールの池と図鑑を持って来ると、図鑑を眺め始める。

M児：「先生、見て。お魚がいっぱい」

担任：「ほんとだね。サバ、マアジ…。何だかお寿司屋さんにいるみたい」M児が持って来たページの魚を読み上げていて、ふと感想を漏らす。

R児：「いいねえ、お寿司屋さん」教師とM児の近くで製作をしていたR児が応える。

「僕、お寿司屋さん行ったことあるよ。玉子とかもあるんだよ」

M児：「うん。そうだね」

R児：「そうだ！僕、お寿司つくる」

S児：「いいねえ、私もつくる」R児とともに製作をしていたS児も加わる。

担任：「おもしろいね。Mくんは魚を釣ってRくんがお寿司をつくるんだね」

R児：「Mくんが釣った魚をお寿司にするってわけね。じゃあ、僕お寿司屋さんね」白いコピー用紙をシャリのような形に丸め、赤い花紙を長四角にたたみ、その上に置く。

担任：「うわあ、すごい。本物のお寿司みたい。これは何のお寿司ですか？」

R児：「マグロだよ」

担任：「やっぱり。赤いからそうかなと思ったよ、Rくん」

S児：「わたしはエビをつくる」R児と同じようにシャリをつくり、上にピンクの花紙をたたんで置く。

M児：「お寿司だね。おいしそう」

R児：「先生、黒い折り紙ちょうだい」

担任：「はい、どうぞ」黒い折り紙を渡す。

R児はそれを細く切り、シャリの上に乗せた黄色の花紙とともに巻く。

R児：「これは玉子だよ」

担任：「おいしそう。他にどんなお寿司があるんだろうね」

M児：「こっち来て」みんなを絵本コーナーに誘う。

R児S児と教師も一緒に行き、絵本コーナーで寿司が載っている本を探し出してその場で眺める。

S児：「私、ウニをつくらう」保育室に戻るとオレンジ色の折り紙を小さく手でちぎり始める。

「先生も手伝って」

担任：「いいよ」

S児：「これをこの上に貼っていくの」シャリの上にちぎった折り紙を乗せ、セロテープで貼り付けていく。

最後にシャリの周りにR児が切った黒い折り紙を巻き、ウニの軍艦巻きが完成する。

この後、S児やR児から「箸をつくるから同じ色の折り紙が2枚欲しい」「お寿司を乗せる皿がいる」などと次々と材料の注文があり、一気に遊びが盛り上がった。M児と図鑑を眺めているときに教師が発した言葉がまさかここまで影響するとは思わなかったが、M児R児S児がお互いの遊びのつながりを感じながら、それぞれの遊びを進める様子を見て援助を続けた。また、以前から副担任と相談していたお楽しみ発表会で、今回のM児とR児の遊びのつながりを保護者にも見せることができたなら幼児の遊びへの理解も深まるのではないかと考え、帰りの集まりでM児の遊びを紹介しながらお楽しみ発表会についてみんなに話をした。すると、M児はすかさず「僕は魚釣りをする」と言い、R児は「じゃあ、僕はお寿司屋さんをやる」と応えていた。振り返りタイムでは、担任の意図しない言葉がきっかけだったとしても、その後幼児同士でアイディアを出し合い楽しみながら遊びを進めていく姿が話題になった。担任は幼児のアイディアに共感しながら一緒に遊びを楽しむだけで、幼児が豊かに育っていることを確認した。そして、幼児が主役であり、幼児自身が見せたい、したいと思ったことを披露する本園のお楽しみ発表会について、M児の遊びを紹介しながら話題にできたこともいいタイミングだった。M児R児の発言により、他の幼児にもお楽しみ発表会で見せたいことを考えるきっかけにもなった。

考察

お楽しみ発表会では、M児はL児とともに魚釣りを、R児S児はお寿司屋を披露した。他の幼児も1月から楽しんできたダンスやコマ回しなどを選んで保護者に披露していた。発表しているときの幼児の顔はとても嬉しそうで自信に満ちていた。やらされる発表ではなく自分がやりたいことを発表するお楽しみ発表会は、その名の通り幼児にとっても保護者にとっても「お楽しみ」である。

3学期が始まっても生活リズムが整わない日が続き、遊びを見付けられない幼児の姿にどのように援助したらよいのか副担任と悩んだ。幼児がしたい遊びを見付けるきっかけになればと思い、教師も一緒に遊びに加わってM児の遊び出した姿を支えた。M児が自分のしたいことに夢中になっていくと、周りの幼児も惹き付けられるように、寿司屋が始まったりアニメのキャラクターになりきったり、ステージをつくって好きなダンスを始めたりするようになった。これまでと違ったのは、遊び出しがゆっくりでも幼児自身が遊びを楽しむ始めると、途端に教師の出番が少なくなり、友達と一緒に相談して決めたりつくったりするようになったことである。明らかに入園当初の姿とは異なり、これまでにしたい遊びをする楽しさや友達と遊びのおもしろさを分かち合う嬉しさを積み重ねてきた経験を感じた。また他の幼児を受け入れて遊ぶM児の育ちも見られた。これまでの日々を振り返ってみると、教師は、幼児自身がつまむ力や友達とかかわる力、一緒に遊びを発展させていく力を信じ、それらを発揮できるような場や機会を用意するとともに励ます言葉かけに終始してきた。今回も、遊び出す時期に教師も一緒に遊んで幼児の気持ちに寄り添いながら援助することで、その後、幼児は一気に遊びを進展させていた。同時に、その中で教師はお楽しみ発表会のことを頭の片隅に置きながら対応できるように場を整えてきた。やりたい遊びを楽しんでいるときにお楽しみ発表会の機会を知らせることによって、幼児にもお楽しみ発表会を楽しむにしたい気持ちが芽生えた。楽しみだからこそ、自分で見せたいことを決め、嬉しそうに発表する姿につながったのではないかと考える。

教師は、なかなか思うように遊べていない幼児の様子を捉えると焦りを感じることもある。しかし、そのような時こそ、目の前の幼児の様子とこれまで積み重ねてきた経験を照らして考えることが大切だと学んだ。

<3歳クラス IV期 1～2月> 「遊び出しを支えながら、お楽しみ発表会へ」

これまでの保育の様子

3学期が始まってすぐに記録的な大雪に見舞われ、1週間の臨時休園となった。冬季休業に続いて、思いがけず休みが長くなり、臨時休園が明けても、なかなか自分のしたい遊びを見付けられない様子が見られた。振り返りタイムでは、**副担任とその状況を共有し、幼児のペースを大事にしながらも遊びの様子を見て積極的に援助していくことを確認¹⁾していた。したいことを見付けられない幼児が遊びを見付けるきっかけをつくる**ことができるよう、**まずは廃材の種類や量を見直した。²⁾**

臨時休業が終わって3日後、出していた折り紙を使ってL児が魚をつくっていた。それを見ていたM児が白いコピー用紙を魚の形に切って魚に見立てる。二人は、それぞれが作った魚を床に置き、積木で池をつくり始めた。M児が、魚釣りをすることを思い付き、空き箱をつなげて釣り竿をつくっていた。この日の振り返りタイムでは、したいことを見付けて遊び出す姿が見られるようになったことや用意した廃材を使ってM児の新しい遊びが始まったことが話題になった。M児の様子からおそらく明日以降もこの遊びをするのではないかと思われた。そして、M児の姿が他の幼児にとっての新たな遊びが始まるきっかけになったと考え、教師もM児と一緒に遊びながら様子を見守ることにした。

翌日もM児は、積木で池をつくり、そこに作った魚を入れて魚釣りごっこを始めた。副担任は、おうちごっこをしている幼児とM児の間に入り、それぞれの幼児と会話しながら遊びの援助をしていた。M児は、この日も白いコピー用紙で魚をつくり、池に見立てた積木の中に入れていた。ずっとその遊びをしているわけではなかったが、その遊びを気に入っているようだった。**振り返りタイムで、やはりM児がこの遊びを続け**そうであることを確認し、**積木で池をつくると毎回片付けることになることから、他のもので池をつくれるようにしたらどうかと話し合った。³⁾**それにより、2月に行われるお楽しみ発表会の発表内容にもかかわってくるかもしれないことも話題になった。

1月22日

M児：「僕、お支度終わったよ」
担任：「おっ、早かったね。Mくん」
M児：「うん。僕、今日も魚釣りするんだあ」積木のところへ行こうとする。
担任：「Mくん、お池つくるの？」
M児：「うん。そうだよ」
担任：「いいねえ。そうだ、**本当のお池みたいにつくってみる？⁴⁾**」
M児：「え、どうやって？」
担任：「ちょっと待っててね」浅めの段ボールを持って来る。
「**こんなものがあるんだけど、どう？⁵⁾**」
M児：「うん、いいね！これでお池をつくろう」
N児：「あのさあ、お池はさあ、水色だよ。この中を水色にしたらお池みたいになるんじゃない？」側でM児と教師のやりとりを見ていたN児が言う。
M児：「え、どうやって？」
N児：「うーん…」しばらく考え込む。
担任：「水色ねえ…あつ、いいこと思い付いた！」教材室から水色のカラービニール袋を持って来る。
「これを段ボールの中に敷いたらどうかな」
M児：「いいねえ、いいねえ、そうしよう」跳びはねながら言う。
教師とM児N児で、段ボールの中にカラービニール袋を貼る。
M児：「お池みたいだね。そうだ、お魚を入れようつと」昨日までにつくった紙の魚を持って来て入れる。
「そうだ！もっとお魚つくろうつと」
担任：「いいね。まだまだいっぱい泳げそうだもんね」
M児：「うん！」
L児：「私もつくる」池づくりの様子を見たL児がやって来る。
L児は白いコピー用紙にクレヨンで魚の形を描き、それをはさみで切り取る。一つできると、さらにも

コメントの追加 [o1]: 幼児が遊びを見付けるきっかけを、幼児に対して直接働きかけるのではなく材を通して援助しているという点に、幼児が自ら遊びに向かう姿を大切にしているという指摘があった。こうした願いともいえる心もちが「幼児の自ら育とうとする力を支える」という認識とつながるものであり、援助を考えるときのベースとなっていた。

¹⁾ 担任、副担任が幼児の様子を振り返り、共有することで援助の方向性を共通理解することができている（d）

²⁾ 幼児の様子に応じて環境を見直している（b）直接的な援助ではなく材に対する援助を行う（c）直接的な援助ではなく間接的に援助することで幼児自身が自主的に遊びを考えられる（d）まずは環境構成を見直すことで幼児が自発的に遊びに向かうことを願っている（e）

³⁾ 共通認識をもって援助できる。M児が遊びをずっと続けるきっかけ（b）遊びをより遊び込めるような援助（d）

⁴⁾ 見守る、待つなどの援助の他、幼児の姿から提案という形で遊びを援助している（e）

⁵⁾ 提案するが決めるのは幼児自身（d）“強制”するのではなく“提案”なので幼児が選んで遊びをつくり出している（f）

う一つつくる。M児は釣り竿を入れて、魚を釣ろうとする。その様子を見てO児P児もやってくる。M児はL児とともに釣り竿に魚をつけて釣れるようにする。
M児：「僕も魚つくろうっと」白いコピー用紙を大きく切って魚に見立てる。
「これはマグロだよ」
担任：「そっかあ、マグロなんだ。他にどんなお魚がいるんだろうねえ…何を見たらお魚が載っているんだろうね？」
M児：「僕、知ってるよ」絵本コーナーに走っていく。
「うみ」の図鑑を見付けると、その場で図鑑を広げて教師やL児N児と一緒に載っている魚を見る。
M児：「そうだ、これ、お部屋に持って行く」
図鑑を保育室に持って行き、他の幼児と一緒にページをめくりながら、ウニやクジラ、マンボウなどを眺める。その後、M児はP児に釣り竿を貸して魚を釣らせてあげる。
この日もM児は池をつくるのに積木を使おうとしていた。これまで段ボールという材で遊んだことがなかったため、大きな場をつくるのに積木を使う幼児が多かった。そこで、担任は振り返りタイムでも確認して

コメントの追加 [o2]: この言葉に、「幼児自身が気付くことができる」「幼児に考えさせている」と捉える教師もいれば、「遊びがさらに発展する」「幼児がもっと知りたい、つくりたいと思う言葉」と捉えている教師もいた。どちらにしても幼児のもつ力に働きかけている言葉と考えることができる。本園の特徴的な援助として、こうした言葉かけが挙げられるが、その効果を理解しているからこそ、共感が集まるのだろう。

⁶ 幼児が気付くことができるような言葉かけ（d）図鑑に載っていると教えるのではなく幼児に考えさせている。遊びがさらに発展するような声かけだと感じた（f）幼児がもっと知りたい、つくりたいとおもうような言葉かけをしている（g）

いた通り、M児が池をつくろうとするタイミングで、遊びを残せるように持ち運びができる段ボールを提案しようと考えた。また、この機会に段ボールという新しい材料を提案することによって、幼児の材料の選択肢に加わればという思いもあった。⁸その一方で、この提案により、幼児の遊びの方向を左右するのではないかと迷い、⁹副担任に相談した。その結果、この日が金曜日で週末になるため、つくった池を残すことができれば週明けも遊びが続くのではないかとなり、提案することにした。M児は担任の提案を受け入れ、担任が新しい材料を持って来たことでN児L児も興味をもち、遊びに加わった。N児は“池”というイメージから、段ボールの中を青くすることを提案するが、N児M児ともにいい考えが思い付かないようだった。カラービニール袋の他にも、色を塗るか折り紙を貼るなどの方法が頭をよぎったが、カラービニールの衣装を着て遊ぶことが多かったことから材として身近なカラービニール袋を提案した。¹⁰その後、L児も加わって遊びが広がっていく様子が見られた。しかし、この提案の仕方については、担任がいくつか提案して幼児自身が決めることができるように働きかければよかったと反省した。¹¹また、M児がこれまでも絵本コーナーで友達と一緒に「うみ」の図鑑を眺めている姿を目にしていたことから、M児が魚の種類を言い始めたタイミングで、担任は「何を見たら載っているのだろう」と問いかけた。¹²友達と一緒にページをめくりながら、「これはクジラ」「サメもいる」などと話しじっくり眺めていた。その様子を見て、段ボールでつくった池と一緒に図鑑を保育室に置いた。¹³振り返りタイムでは、今日の経緯を共有し、来週以降の様子を見ることにした。

1月25日

M児は、登園後の支度を終えると、副担任が様々な種類の廃材を出していた製作テーブルに行く。
M児：「僕、いいこと思い付いちゃった。先生、それ、ちょうだい」副担任がちょうど手にしていたトイレットペーパーの芯を指さして言う。
副担任：「いいよ。はい、どうぞ」
M児：「ありがと」トイレットペーパーの芯に折り紙を巻き、セロテープで留める。
「今日は、こんな形の魚だよ」副担任に見せる。
副担任：「Mくん、おもしろいこと思い付いたね¹⁴」
M児：「えへへ、僕、考えたでしょう。お魚はしっぽがあるからしっぽも付けるんだあ」スズランテープを10cm程の長さに切って、つくった魚に付ける。その後、黒いクレヨンで目と口を描く。1つ作り終えると、同じ要領で何個かつくる。その様子を近くでQ児がじっと見ている。
M児：「Qちゃんもやりたいの？」Q児の視線に気付いたM児が言う。
Q児：「…」
M児：「ちょっと待っててね」白いコピー用紙を持って来て、それを筒状に丸め、30cm程の長さに切った赤いスズランテープを付ける。
「はい。Qちゃんのだよ」つくった釣り竿をQ児に渡す。
Q児は黙ったまま受け取る。M児は段ボールでつくった池を持って来て、自分がつくった魚を入れる。そして、M児はQ児が魚釣りをできるように渡した釣り竿の先にセロテープを輪にしたものを付ける。Q児M児と一緒に段ボールの中に釣り竿を垂らし、魚釣りを試みる。しばらく魚釣りをした後、二人で「うみ」の図鑑を眺める。
M児：「海をつくりたい」図鑑を見ながら言う。
副担任：「海かあ、いいね。どうやってつくる？」¹⁵
図鑑のページを副担任に見せながら相談を始めたところで、片付けの時間になる。

創意あふれるM児は、副担任が手にしていたトイレットペーパーの芯を見て、本当に「いいこと」を思い付いたのだろう。これまで紙でつくった平面の魚が立体的な形へと変わり、顔やしっぽが付いてより本物らしくなった。週明けだったが、魚や魚釣りに対するM児の思いは切れていなかった。この日の振り返りでは、金

コメントの追加 [a3]: 保育をしているときの迷いはどの教師

師にもある。しかし、それを隠すのではなく、振り返り

タイムで話題にするからこそ、次に活かすことができ

る。ここに多くの共感が集まったのは、そのよさを多く

の教師が実感していると言えるのではないかな。

コメントの追加 [a4]: 自分が行った援助について他の教師

と話すことにより、その意味付けがなされる。その反省

や意味付けをもとに、次にどのような援助を行うか考え

ることができる。まさにPDCAサイクルが回っている

と言えよう。「うまくいかなかった」「こうすればよかつ

た」という“失敗”を意味あるものにすることで、保育に前

向きになることができ、自分の専門性を高めていくこと

ができる。

⁷ 遊びの継続につながる援助を考えている (e)

⁸ III期までの育ちを踏まえ、このタイミングでより大型の材料を知り、遊びへの興味につなげている (e)

⁹ 材の出し方が遊びを大きく変えることを共通認識している (c) 独りよがりではない保育 (d) 幼児の予想される動きについて前もって副担任と相談したことと同じ思いで援助することができており、改めて共有の大切さを感じた (f) 幼児のやりたい遊びを第一に考えた提案を考えている。そして、迷ったときは副担任の相談している (g)

¹⁰ 様々な選択肢を考えつつ、そのとき、目の前の幼児にとって何が適しているかを考えている (b)

¹¹ 提案して終わりではなく、よりよい方法を振り返っている。次につながる (b) 幼児主体の遊びであることを理解している (c) 日々の保育を次の日以降に活かすことができる (d)

¹² M児のこれまでの姿を踏まえて、声をかけている (b)

¹³ 主張しない環境構成 (c) 本や図鑑が遊びを充実させる。だからこそ、遊びと図鑑がつながるような言葉かけや環境構成をしている (e)

¹⁴ 幼児のアイディアを称賛する声かけで安心して製作ができている (f)

¹⁵ 幼児の発想への受容が自信につながる。そして、自分で考えられるような言葉をかけている (e)

曜日に相談した通りの姿が見られたことで援助に対する手応えを共有した。そして副担任は、黙々と釣り竿をつくっていたM児がすっかり自分のものをつくっていると思ったが、実はQ児のためにつくっていたことを見て驚いたと話していた。M児は、これまで外で土を使ったチョコレートづくりを長期間に渡って黙々とやっていたことがあったが、ずっと一人だった。一人で試したいことややりたいことを自分が納得するまでやっており、友達を求めていなかった。他の幼児が興味をもって加わりとうると、断りはしないものの途中で離れたり止めたりすることが多かった。それが、今回は、何も言わないQ児に対して自分から釣り竿をつくって渡し、自分の遊びに誘うようにしていた。副担任は、Q児の思いをM児なりに汲んで行動を起こした姿に成長を感じ、担任も同様の思いだった。¹⁶また、Q児もこれまで自分から他の幼児の遊びに興味をもって近付くことが少なかった。友達を受け入れてかかわって遊ぶM児の姿、そしてM児の遊びに興味をもちかかわるQ児の姿を目の当たりにして、この遊びが続くことを願った。M児が図鑑を参考に「海をつくりたい」と言ってきたので、次回はホワイトボードの3連板を提案することを確認した。¹⁷

1月27日

登園後の支度を終えると、M児が段ボールの池を保育室の真ん中に持って来て置く。集まってきた幼児に魚を見せたり魚釣りをさせてあげたりする。
M児：「海つくる」しばらくしてやって来る。
副担任：「そうだったね。どうやってつくろうか」
M児：「うーん」
副担任：「Mくん、ここにこういうのがあるよ」すぐ近くに置いてある3連板を持って来る。¹⁸
M児：「うん。ここに青いのを貼る」
副担任：「分かったよ。青ね」教材室から水色のカラービニール袋を持って来る。
「これでいいかな？」
M児：「うん、それでいいよ」カラービニール袋を受け取ると、3連板の一面にセロテープで貼る。
「できた。僕、この魚をつくる」傍らに図鑑を置き、トイレットペーパーの芯に赤い折り紙を巻いて気に入っているサクラダイをつくる。できあがると、海に見立てたカラービニール袋の上に貼る。
「今度は、海だから潜水艦もつくろうっと」トイレットペーパーの芯を2個つなげて黄色とピンクの花紙を巻き潜水艦をつくる。サクラダイの近くに貼る。
図鑑を眺めながら黙々とつくっていたM児が図鑑を持って副担任のところにやって来る。
M児：「海には下に砂があるんだね」
副担任：「これは砂なんだね」図鑑を見ながら言う。
M児：「じゃあ、砂もつくらなくっちゃ」
副担任：「おもしろいね、いい考えだね。どうやってつくる？」¹⁹
「これの茶色もあるよ」いつも材料コーナーに用意している黄色の花紙を見せる。
M児：「砂は大きいから、もっともつというね」
片付けの時間になり、担任が保育室に戻って来る。
M児：「先生、見て！ほら、海をつくったんだよ」
担任：「Mくん、すごいね。海もつくったんだね」
M児：「うん！」

朝の支度を終えると、毎日M児は段ボールでつくった池を保育室の真ん中に置いた。それにより、Q児などの他の幼児も集まってくる。この日M児は、前日やり残した海づくりをすぐに始めた。副担任も打合わせた通り、ホワイトボードの3連板を提案した。この3連板を提案したのは、つくったものを残すことができ、²⁰さらに移動させることもできると考えたからである。M児が毎日必ず段ボールの池を持って来て短時間でも魚釣りをして遊ぶ様子を見てみると、お楽しみ発表会でこの遊びを見せるかもしれないと思ったため移動もできるようにしたかった。²¹また、M児は毎日「うみ」の図鑑を眺めていた。次第に魚への興味も深めていき、「サクラダイ」「マンボウ」「イカ」などを気に入って、それらをつくるようになった。できた魚は海に貼ったり池に入れて釣ったりして自由に使っていた。池の中は魚が増え、自分が魚をつくっているときは他の幼児に釣り竿を貸して魚釣りをさせてあげるようにもなっていた。そして、連日いい具合に、片付け間際になる

¹⁶ 日々、幼児理解を共有しているので成長を感じるポイントも同じである→共通理解ができている（d）

¹⁷ 振り返りで、次の手立てを確認することで同じ方向性で援助ができる（b）

¹⁸ 保育の方向性を確認してあるので、幼児の願いに対して迷わず援助することができる（e）

¹⁹ 幼児の考えやアイデアを受け止め、さらに興味をもたせる言葉かけをしている（g）

²⁰ 遊びを継続することができ一遊び込むことができる（d）遊びが続き深まるためにはと考えられた材や道具を提案している（g）

²¹ 教師側は意図をもちつつも幼児の思いに寄り添う形で自然に提案している（e）

頃、次にこうしたいということが出てくる。それにより、M児の遊びへの思いが続くことになる。M児は、翌日カラービニール袋の底の方に黄色の花紙を貼って砂底をつくり、これで満足したのか、その後は寄ってきた友達と魚釣りをしては図鑑を見ることを繰り返していた。

1月29日

M児は登園の支度を終え、いつものように段ボールの池と図鑑を持って来ると、図鑑を眺め始める。
M児：「先生、見て。お魚がいっぱい」
担任：「ほんとだね。サバ、マアジ…。**何だかお寿司屋さんにいるみたい²²**」M児が持って来たページの魚を読み上げていて、ふと感想を漏らす。
R児：「いいねえ、お寿司屋さん」教師とM児の近くで製作をしていたR児が応える。
「僕、お寿司屋さん行ったことあるよ。玉子とかもあるんだよ」
M児：「うん。そうだよ」
R児：「そうだ！僕、お寿司つくる」
S児：「いいねえ、私もつくる」R児とともに製作をしていたS児も加わる。
担任：「おもしろいね。Mくんは魚を釣ってRくんがお寿司をつくるんだね」
R児：「Mくんが釣った魚をお寿司にするってわけね。じゃあ、僕お寿司屋さんね」白いコピー用紙をシャリのような形に丸め、赤い花紙を長四角にたたみ、その上に置く。
担任：「うわあ、すごい。本物のお寿司みたい。これは何のお寿司ですか？」
R児：「マグロだよ」
担任：「やっぱり。赤いからそうかなと思ったよ、Rくん」
S児：「わたしはエビをつくる」R児と同じようにシャリをつくり、上にピンクの花紙をたたんで置く。
M児：「お寿司だね。おいしそう」
R児：「先生、黒い折り紙ちょうだい」
担任：「はい、どうぞ」黒い折り紙を渡す。
R児はそれを細く切り、シャリの上に乗せた黄色の花紙とともに巻く。
R児：「これは玉子だよ」
担任：「おいしそう。他に**どんなお寿司があるんだろうね²³**」
M児：「こっち来て」みんなを絵本コーナーに誘う。
R児S児と教師も一緒に行き、絵本コーナーで寿司が載っている本を探し出してその場で眺める。
S児：「私、ウニをつくらう」保育室に戻るとオレンジ色の折り紙を小さく手でちぎり始める。
「先生も手伝って」
担任：「いいよ」
S児：「これをこの上に貼っていくの」シャリの上にちぎった折り紙を乗せ、セロテープで貼り付けていく。
最後にシャリの周りにR児が切った黒い折り紙を巻き、ウニの軍艦巻きが完成する。

この後、S児やR児から「箸をつくるから同じ色の折り紙が2枚欲しい」「お寿司を乗せる皿がいる」などと次々と材料の注文があり、一気に遊びが盛り上がった。M児と図鑑を眺めているときに教師が発した言葉がまさかここまで影響するとは思わなかったが、M児R児S児がお互いの遊びのつながりを感じながらも、どちらかの遊びに流れていくのではなく、**それぞれの遊びにこだわって楽しむ様子²⁴**を見て援助を続けた。また、以前から副担任と相談していたお楽しみ発表会で、今回のM児とR児の遊びのつながりを保護者にも見せることができれば幼児の遊びへの理解も深まるのではないかと考え、帰りの集まりで**M児の遊びを紹介しながらお楽しみ発表会についてみんなに話をした。²⁵**すると、M児はすかさず「僕は魚釣りをする」と言い、R児は「じゃあ、僕はお寿司屋さんをやる」と応えていた。振り返りタイムでは、担任の意図しない言葉がきっかけだったとしても、その後幼児同士でアイデアを出し合い楽しみながら遊びを進めていく姿が話題になった。担任は**幼児のアイデアに共感しながら一緒に遊びを楽しむだけ²⁶**で、幼児が豊かに育っていることを確認した。そして、幼児が主役であり、幼児自身が見せたい、したいと思ったことを披露する本園のお楽しみ発表会について、**M児の遊びを紹介しながら話題にできたこともいいタイミングだった。²⁷**M児R児の発言

²² ひっぱっているつもりはないだろうが、遊びを導いてしまった感が残る（c）この一言で遊びが大きく発展したことに驚いた。教師が発する言葉の影響の大きさを改めて感じた（f）

²³ 遊びの広がりにつながる言葉かけも積極的な援助と捉える（e）

²⁴ ここがポイントなのではないか。M児はR児の寿司に流されず、魚釣りを一貫して楽しもう、発表しようとしている。それぞれの楽しさ、魅力があることが読み取れる。

²⁵ 好きな遊びをずっと続けているM児の遊びを紹介したことで、他の幼児も発表会への楽しみな気持ちが芽生えるきっかけになった（b）

²⁶ 幼児の遊びをそのまま受け入れ一緒に楽しんでいる（g）

²⁷ お楽しみ発表会を経験したことのない3歳クラス児が「やってみたい」と前向きに考えられるように、話題を出すタイミングを計っている

コメントの追加 [05]: これは、うっかり担任が漏らしたつぶやきだった。この言葉を聞いていたR児が新しい遊びを始める。教師が発する言葉の影響の大きさを痛感したが、他の教師も同じように感じていたことが分かった。その影響の大きさから、これが幼児の遊びを方向付け導いたように見えるという指摘もあった。こうした指摘からは、本園においては遊びは幼児がつくっていくものであり、教師が遊びをリードするような言葉には気を付ける必要があるという考え方が見えてくる。

により、他の幼児にもお楽しみ発表会で見せたいことを考えるきっかけにもなった。

考察

お楽しみ発表会では、M児はL児とともに魚釣りを、R児S児はお寿司屋を披露した。他の幼児も1月の終わり頃から楽しんできたダンスやコマ回しなどを選んで保護者に披露していた。発表しているときの幼児の顔はとても嬉しそうで自信に満ちていた。やらされる発表ではなく自分がやりたいことを発表するお楽しみ発表会は、その名の通り幼児にとっても保護者にとっても「お楽しみ」である。²⁸

3学期が始まって生活リズムが整わない日が続き、遊びを見付けられない幼児の姿にどのように援助したらよいのか副担任と悩んだ。幼児がしたい遊びを見付けるきっかけになればと思い、教師も一緒に遊びに加わってM児の遊び出した姿を支えた。M児が自分のしたいことに夢中になっていくと、周りの幼児も惹き付けられるように、寿司屋が始まったりアニメのキャラクターになりきったり、ステージをつくって好きなダンスを始めたりするようになった。これまでと違ったのは、遊び出しがゆっくりでも幼児自身が遊びを楽しむ始めると、途端に教師の出番が少なくなり、²⁹友達と一緒に相談して決めたりつくったりするようになったことである。明らかに入園当初の姿とは異なり、これまでにしたい遊びをする楽しさや友達と遊びのおもしろさを分かち合う嬉しさを積み重ねてきた経験を感じた。また他の幼児を受け入れて遊ぶM児の育ちも見られた。これまでの日々を振り返ってみると、教師は、幼児自身がもつ楽しむ力や友達とかかわる力、一緒に遊びを発展させていく力を信じ、それらを発揮できるような場や機会を用意するとともに励ます言葉かけに終始してきた。³⁰今回も、遊び出す時期に教師も一緒に遊んで幼児の気持ちに寄り添いながら援助することで、その後、幼児は一気に遊びを進展させていた。同時に、その中で教師はお楽しみ発表会のことを頭の片隅に置きながら対応できるように場を整えてきた。やりたい遊びを楽しんでいるときにお楽しみ発表会の機会を知らせることによって、幼児にもお楽しみ発表会を楽しみにする気持ちが芽生えた。楽しみだからこそ、自分で見せたいことを決め、嬉しそうに発表する姿につながったのではないかと考える。

教師は、なかなか思うように遊べていない幼児の様子を捉えると焦りを感じることもある。しかし、そのような時こそ、目の前の幼児の様子とこれまで積み重ねてきた経験を照らして考えることが大切だと学んだ。

31

(e)

²⁸ やりたいこと、好きなことから喜んで発表したくなる。幼児が嬉しい気持ちで発表会に向かうことができている(b)

²⁹ かかわりが教師<友達(c)

³⁰ 教師が育てるのではなく、幼児が自ら育て行くように支える心もちを大切にしている(e)

³¹ 幼児主体である(d)